

縁

若
衆

散

浮
ぶ
先
生
に

志縁・尊縁・結縁
第1回「三縁の会」

2010(平成22)年4月8日

我が人生 いかに 生くべきか

Speculation on the purpose of life

人生の第一義

京都産業大学教授 若泉 敬

「わが人生、いかに生くべきか」とは、心ある人なら誰でも自らに真剣に問いかける永遠のテーマであろう。

特に、これから成人し社会に出ようという青年にとって、それは避けて通れない自我確立への苦悩に満ちた模索の過程である。

飽食暖衣の泰平楽に慣れている今日の学生諸君と語りながら、折にふれて私は、彼らに根源的な問題を提起しかつ訴えている。

「いまこそ志(目標)を立て、意義ある充実した人生を送るよう努めて欲しい。事の成否は別として、死に臨んで“嗚呼、自分の一生は虚しかった”と後悔するようなことにならないように」と。

若泉 敬先生の手記 1984(昭和 59)年 9 月 17 日

「若泉 敬先生と私」

出会いと鴻恩を偲ぶ

若泉 敬先生に初めてお会いしたのは、私（昭和 25 年 9 月 7 日生れ）が福井県立若狭高等学校 3 年生で、大学受験期の 1969（昭和 44）年 1 月でした。

場所は、ひな菰奥様のご実家（福井県武生市）です。

先生からは「京都産業大学は新しい大学です。共に学びフロンティア精神で立派な大学にしましょう」とのお誘いをいただきました。その時の「仁なる眼差し」は深い感激となって、生涯忘れることができません。

同年、京都産業大学法学部に入学。学生寮・自治会活動を通じて大所高所のご助言ご指導をいただき、卒業と同時に母校に事務職員として奉職。爾来「知の奔流・教育の道場」をともづなに、「運命共同体」として学生、教職員と共に大学の進運に夢を抱き汗を流しました。

先生は「世界の中の日本、自国の安全保障」のありかたについて研究、実践に邁進され公論をリードし、一命をかけて「沖縄の祖国復帰」という回天の大業を成し遂げられたのです。

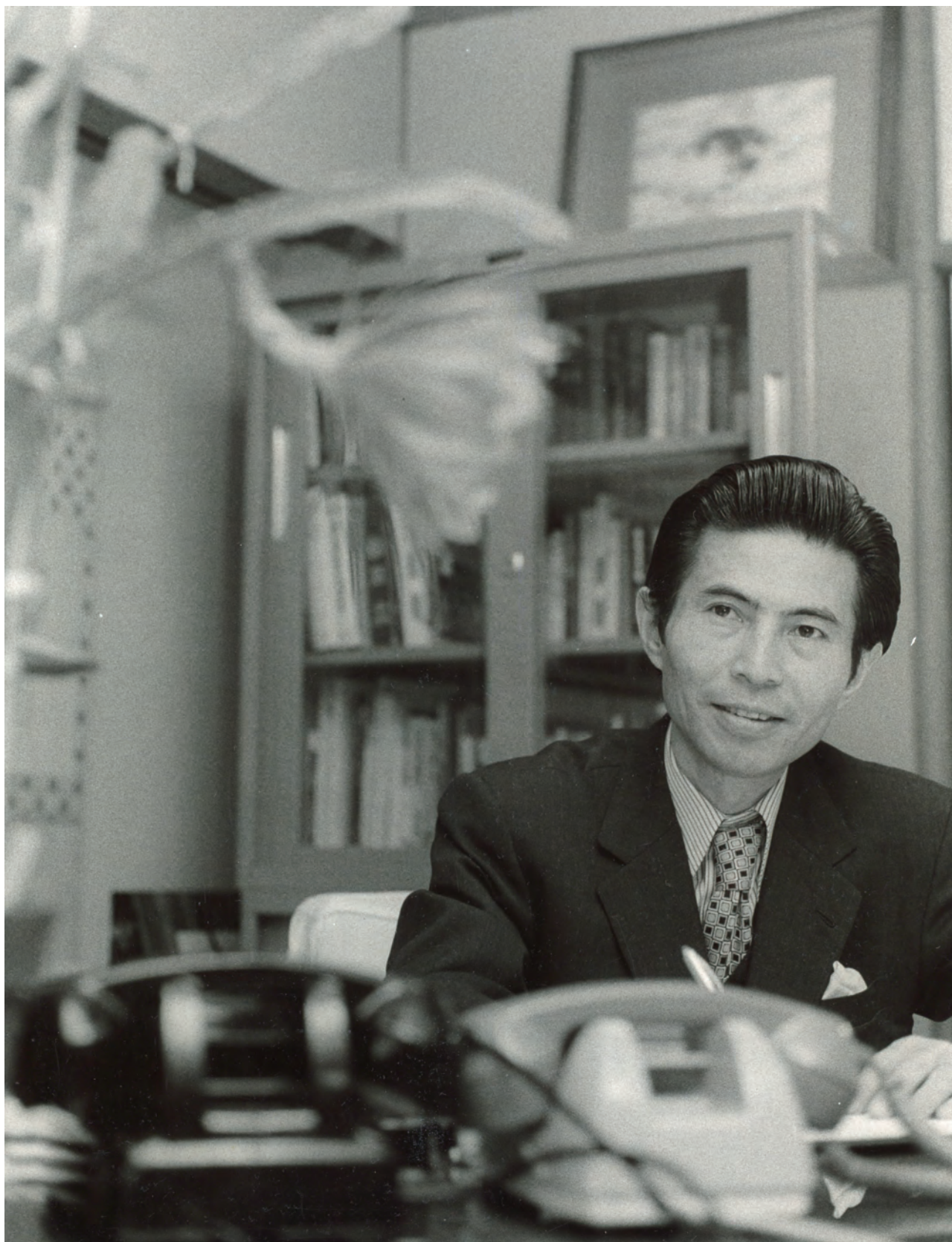
先生は国際政治学者、教育者、真摯謹厳で文武両道の練達の士、慈父として、私と家族を終生愛して下さいました。私にとっては「人生の師表」として、永年にわたり汲めども尽きぬ泉のご鴻恩をいただき、心の奥底から景仰でき得る喜びと、深い縁を大事にしたいものと念じています。

若泉 敬先生の御魂は「北斗の星」「愛国の道標」となり、日本の次代を担う青年には、毅然とした自主独立の精神を以って「我が人生、いかに生くべきか」を問い続けて欲しいと、今もなお語りかけているのです。

2010（平成 22）年 7 月 27 日

ふる里の 澄みわたりたる 夏の空

吉村 信二
Yoshimura Shinji



後期戦中派 若泉 敬先生の「生き方のかたち」

*The Life and Thought of Wakaizumi Kei,
a Scholar and Diplomat of the Young Mid-War Generation*

京都産業大学世界問題研究所長 兼 東京事務所長の時代 <若泉 敬先生 42 歳 1972(昭和 47)年>
東京都新宿区大京町 26 野口英世記念館 201 のオフィスで

「三縁の会」誕生 もう一つの理由(わけ)

- 考えられないことを考え抜く、勇気と実行
- 我が人生、いかに生くべきか

〈国際政治学者・教育者 若泉 敬(わかいずみ・けい)先生の^{ことづて}訓導〉

「世界の中の日本」の在り方を提唱し、沖縄の祖国復帰に尽力された若泉 敬先生(1930-1996・京都産業大学教授)は熱情をもって若い方々に問いかけられました。

「真贋を見抜き、何が本質なのか」「現状のまま、これでいいのか」…と。

「考えられないことを考え抜く、勇気と実行」そして苦難を恐れず半歩でも前進し、たった一度しかない人生に「我が人生、いかに生くべきか」を真摯に自問しましょう…と。

この言を素心として、私は「報恩感謝」の日々(余命)を送りたいものと希っています。

吉村 信二
Yoshimura Shinji

若泉 敬教授が唱える「日本のあるべき姿」の3本柱〈1970年代提唱〉 国家の自己定義 National self-definition

- | | |
|------------|--|
| ① 再独立の完成 | 国家主権の回復(戦後体制の見直し)
日本の歴史、文化、伝統を尊ぶ日本人 独立自尊の精神 |
| ② 国家目標の確立 | 真のリーダーの出現 国策としての内政戦略、外交戦略
日本を誇りに思う、世界に貢献する日本人の育成 |
| ③ 日米安保の再検討 | 自国の命運を他国に委ねない国防意識(気概)
親米、反米にとらわれない自主防衛の推進
国内米軍基地の段階的縮小 |



「対話」の合間に談笑するトインビー教授(左)と
若泉教授(ロンドンのトインビー家の書斎で)

ロンドンでロングインタビュー
1970(昭和45)年6月10日～16日

『トインビーとの対話 未来を生きる』 <インタビュー時の若泉敬先生40歳>
アーノルド・J・トインビー 若泉 敬 1971(昭和46)年4月10日発行 毎日新聞社(定価850円)
・毎日新聞紙上で長期連載 1970(昭和45)年8月24日から12月20日まで97回

『トインビーとの対話 未来を生きる』

アーノルド・J・トインビー 若泉 敬 毎日新聞社刊

1971(昭和 46)年 4 月 10 日発行

序 文

若泉 敬

なぜ、若い世代が、既存の価値観に疑念を抱くのか。なぜ、その一部が現実から逃避し、なぜ、一部が過激な反体制運動に走るのか。単なる世代間の断絶というより、現代文明に対するもっと本質的な問題提起を含んでいるのではないだろうか。

1960 年代の後半、全世界に吹荒れた大学紛争の嵐のなかで私自身が深刻に悩み、切実に模索していた。1969 年春、ロンドンを訪れた際、日ごろ尊敬するトインビー教授に私は、率直にこの苦悩を訴えてみた。

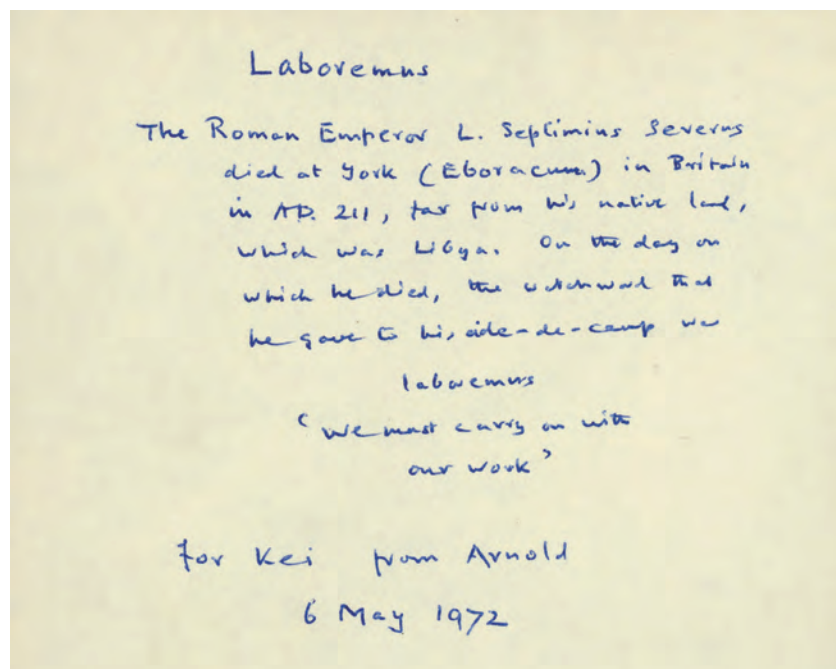
教授との真剣な話合いのなかで、私は、きわめて貴重な示唆を受けた。そこで、ぜひ、これらを広く世界の若い世代に紹介し、また、自信を失っている大人たちにも伝えたいと、考えるに至った。

人間精神の危機が叫ばれ、人間の存在そのものが問われようとしている今日、人類の直面する基本的な諸問題について、教授の思想をこの際、ぜひ、体系的に一冊の書物にまとめたいと考え、教授の快諾を得て、ただちにこの計画を進めることにした。

もとより、私自身、このような対話の相手としてかならずしも適任者だとは考えなかったので、他に人を求めてみたが、うまくいかなかった。

結局、教授からの「君自身と話合ってみようではないか」という言葉に励まされて、この対話を自ら試みる決意を固めた次第である。

<抜粋>





和やかなひと時 東海道新幹線の車中で <若泉 敬先生 37 歳>
トインビー博士右側、ベロニカ夫人左側、若泉 敬先生中央

- ・「世界と日本を語る」ハワイ・ホノルル対談
アーノルド・J・トインビー博士と若泉 敬教授
プレジデント・クリーブランド号の船上で TV 収録 1967(昭和 42)年 10 月 31 日(火)
- ・対談の全容 日本テレビ・NTVの番組「ニッポンであいましょう」で放送 <カラー>
1967(昭和 42)年 11 月 3 日(金) 21:15~23:00
- ・トインビー博士が学生に熱く語る講演 <京都産業大学体育館>
演題「未来の世界像と文化」 1967(昭和 42)年 11 月 16 日(木)
- ・トインビー博士の公開講演 <国立京都国際会館>
演題「人口の都市集中化の問題点とその対策」 1967(昭和 42)年 11 月 18 日(土)

京都産業大学世界問題研究所と若泉 敬先生

若泉 敬先生は新進気鋭の国際政治学者、京都産業大学のスポークスマンとして、
あらき としま いわくろひで お
荒木俊馬総長、岩畔豪雄所長との三人の「同志的結合体(世界問題研究所)」によって、世界秩序の新構想、新しい大学像の構築、世界の碩学の大学招聘など、創学浅い大学の隆運と知名度アップに貢献した。

設立年：1966(昭和 41)年 4 月 1 日 京都産業大学東京事務所を同時併設

＜若泉 敬先生 36 歳＞

所在地：東京都新宿区大京町 26 野口英世記念会館 201

理事・初代所長：岩畔豪雄先生 ＜所長 1966.4.1－1970.11.22＞

(京都産業大学設立に参画、理事を務める)

＜1897(明治 30)年 10 月 10 日－1970(昭和 45)年 11 月 22 日＞

教授・所員・2 代目所長：若泉 敬先生 ＜所長 1970.12.1－1980.4.30＞

(京都産業大学法学部教授・大学部局長会メンバー)

＜1930(昭和 5)年 3 月 29 日－1996(平成 8)年 7 月 27 日＞

■ 世界問題研究所の組織・研究内容

＜世界問題研究所規定(抜粋) 昭和 41 年 4 月 1 日制定＞

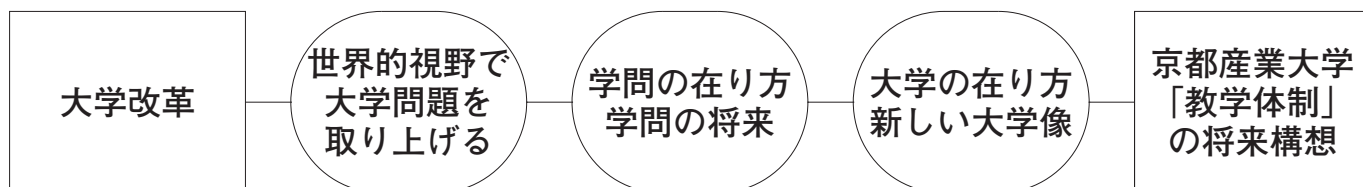
- ・第 1 部 社会、政治、経済、軍事、その他世界史的な意義を内包する世界状況を調査し、その結果を資料として整理し、保存する。
- ・第 2 部 人類又は我等の国家社会のために必要且つ緊急な世界史的対策を研究する。
- ・第 3 部 世界史的意義を内包する文化及び思想の実態を調査すると共に公正妥当な対策を研究する。

■ 京都産業大学の将来像としての基本研究テーマ

ーインターディシプナリーの総合研究ー

1. 「学問の将来と大学の在り方」＜昭和 47 年、48 年、49 年の 3 ヶ年共同研究＞
2. 「世界秩序の形成と新学問体系への展望」

＜昭和 51 年、52 年、53 年の 3 ヶ年共同研究＞





Tokyo から世界へ雄飛 若き日の若泉 敬先生
京都産業大学世界問題研究所長 兼 東京事務所長
＜若泉 敬先生 40 歳のころ 1970(昭和 45)年代＞

新聞『日刊福井』(現『日刊県民福井』)の原流 —「日本の民主主義を育てる会」の機関紙『民主主義』—

■ えせ民主主義を排し「真の民主主義」を育てる運動の展開

「日本の民主主義を育てる会」(略：民主主義の会) 1969(昭和44)年6月19日(木)発足の名称は若泉 敬先生の進言に基づき、代表の熊谷太三郎先生が決定した。

※ 熊谷太三郎先生 <1906(明治39)年11月3日—1992(平成4)年1月15日>

(株)熊谷組の2代目オーナー社長、福井市長として福井大空襲<1945・7・19>・福井大震災<1948・6・28>の復興に10年間尽力する。九頭竜川など大水害の改修・治水事業に挺身、アララギ派の歌人。

自民党参議院議員、自民党県連会長、福田赳夫内閣の科学技術庁長官を務める。

<熊谷太三郎先生、梅子奥様は吉村信二・玲子の結婚式の仲人様>

■ 『民主主義』の創刊 1969(昭和44)年9月3日(水)初号 <若泉 敬先生39歳>

(隔月発行・タブロイド版)

創刊の言葉 「真の民主主義確立を」熊谷太三郎先生

「許せぬ学生の暴力」若泉 敬先生

■ 真の民主主義確立に行動する同志・主要メンバー

『民主主義』・『日刊福井』への寄稿 勉強会の講師を務める <順不同>

熊谷太三郎先生、*若泉 敬先生、林 健太郎先生、飯島 清先生、城地善蔵先生、

*今日出海先生、*村松 剛先生、*桶谷繁雄先生、*小谷秀二郎先生、

*入江通雅先生、*三好 修先生、*丹羽春喜先生、*三木 新先生、*漆山成美先生

<*印は著名な識者であり 京都産業大学教授で「民主主義の会」の頭脳集団となった>

■ 『日刊福井』の創刊 1977(昭和52)年7月1日(金)初号 <若泉 敬先生47歳>

オーナー社主である 熊谷太三郎先生と若泉 敬教授らの念願 「新聞」発行

<福井県紙として、『福井新聞』・『日刊福井』の2紙体制となる>

・社会の木鐸として、健全な世論の発達に奉仕するオピニオン紙

・言論で世の中の真贋を質し、真の民主主義を確立するオピニオン紙



全米の世論を沸騰させたテレビ討論番組に出演 <若泉 敬先生 41 歳>

タイトル「アメリカは日米安保条約を廃棄すべきか否か」

- ・ 若泉 敬先生は安保維持論者として自説を述べた
1972(昭和 47)年 2 月 1 日 <全米で放送：90 分間>
- ・ 『文藝春秋』 1972(昭和 47)年 4 月 1 日号で TV の全容を完全再録



アーミン・マイヤー駐日米国大使のレセプション(東京)

1972(昭和 47)年 3 月 16 日(木) <左側 若泉 敬先生 41 歳、ひな枝奥様 41 歳>

- ・中央 マイヤー大使夫妻、右側 荒木俊馬 初代京都産業大学総長と京子奥様
- ・若泉 敬先生はニクソン政権の「日米繊維交渉」をめぐって マイヤー大使とのチャンネルをもった

アッセンブリーアワー講演会

若泉 敬 教授

1983(昭和 58)年 4 月 13 日(水)

13:00~14:30 京都産業大学 515 大教室

〈昭和 58 年度 新入生を対象とした講演会〉

- 私は、新入生の皆さんに 3 つのことを問いかけてみたい。
何故、大学に進学したのか
数ある大学の中で、何故、京都産業大学に入ったのか
京都産業大学で何をしようとするのか
- 入学時に配布された『雄飛 (学生自治会)』『教学の精神 (京都産業大学)』『京都産業大学新聞 (学生新聞局)』『京都産業大学報 (京都産業大学)』等の中でも、『雄飛』と『教学の精神』の 2 冊を必ず読み、これらは在学中の 4 年間に限らず、卒業してからも繰り返し時として紐解いて欲しいと願っています。
即ち、京都産業大学のアイデンティティーと学生として為すべきことが述べられている必見の冊子なのです。
- 『京都産業大学新聞』(昭和 58 年 4 月 1 日 第 30 号)には、「なぜ、大学に行くのか？」と題して、学生・保護者のアンケート結果が報じられており、注目にあたいます。
大学進学動機として、「勉強のため」…と答えたのは、14% であって本来、学生の本分としては、残念ながら低い数値であるといえます。
大学進学動機や目標が希薄であるという、現状を注視しなければなりません。
- 高校生の 40% が大学進学する現況を鑑み、私の気持ち(本音)としては、ただ何となく大学進学する人よりも、高校を卒業して実社会で苦労しながら働いている人たちの方が、はるかに立派であると思います。
尚更に、大学進学した諸君には確固たる「動機と目標」を持って欲しいものです。
- 朝日新聞(昭和 58 年 4 月 10 日 朝刊:投書欄から)「社会人になって知る 親の苦労」と題した、若い女性の声(投書)を読みながら学生と社会人の心構えの違いと、両親の苦労談の一端を紹介。
- 『京都産業大学報』(昭和 53 年 7 月 6 日 第 77 号)「夏期休暇に際して」荒木俊馬総長の執筆

今まで過ごして来た大学生活を振り返り、次の問題を真剣に考えてもらいたい、と思うのです。

それは諸君各自で『何の目的で諸君は大学に入学したか』、換言すれば『何のために高い授業料を払ってまで大学教育を受けるのか』という問題をです。

- 一文を読みながら紹介し、私（若泉）は、『京都産業大学報』のこのメッセージを、荒木総長（昭和53年7月10日逝去）のまさしく遺言であると確信しており、全く同感のいたりです。

入学早々の学生に大学進学の意味について覚醒（自覚）させることが、大学教育で一番大切なことといえます。

- ・ 大学の「入学」とは、ゴールではなくスタート地点に立ったのであることを十分に認識しなければなりません。

一人の人間にとって、一度しかない人生に悔いが残らないよう「我が人生、いかに生きべきか」を真剣に模索することが、唯一この時期すなわち多感な大学生時代であるといえましょう。

■『雄飛』 新入生のために（昭和58年4月1日）

志学会執行委員長 小林慎一 「目標を定めて前進せよ！」新しき志学会員を迎えて
本学の建学の理念・教育理念というものが、「建学の精神」なのです。ですから、本学に入学した今、この「建学の精神」を理解し身につけない限り、本学に入学しても、それは全く意味を為さないものとなります。

「建学の精神」を理解しない限り京都産業大学で学んだということにはならないのです。

- 一文を読みながら紹介し、私（若泉）は、全学学生（自治会）の代表者である、志学会執行委員長のこのメッセージは、皆さんが学生として自覚せねばならないことを説諭し、且つ確証をついており、大変重みのある文言と思っています。

■『京都産業大学報』 新入生号（昭和53年4月3日 第74号）

「53年度 新入生を迎えて」 総長 荒木俊馬 〈京都産業大学創設者 1897.3.10－1978.7.10〉

私は諸君に入学式に際してパンフレット『教学の精神』を配布して置きました。諸君には或いは少々難しいかもしれませんが。そのため毎年ほとんど多くの学生諸君が、貰いっぱなしで読まないようですが4年間の在学中何回も繰り返し読んで下さい。

さすれば始めは無駄なように思われるかも知れませんが、諸君の将来の人生に末永く必ずや役立つであろうと、私は確信するものです。

- 一文を読みながら紹介し、私（若泉）は、この『教学の精神』（建学の精神）はまさしく私立大学（京都産業大学）の命であり源流であると確信しています。

この冊子を繰り返し熟読玩味し、自分自身のものとして体得することで、意義ある学生生活を送って欲しいものです。

■『教学の精神』 創設者 荒木俊馬博士の肉声：第1回入学式、開学式典、第1回卒業式等を収録

〈第1回入学式告辞から 昭和40年4月21日〉

現在の一触即発ともいうべき国際的危機と不安定極まりなき国内諸情勢に直面して、祖国日本の将来の運命を荷負うて立つ指導的若人を育成する最高教育機関としての総合大学を新しく創立するに非ざれば、わが国の前途は破滅の一路を辿るやも知れぬ、そういう私の憂国の至情が、幸いにして学会、財界、政界の多数の同憂の各位の共鳴と絶大の御支援を得て、今日、本学の実現を見るに至ったのであります。

本学は産学協同を実践する総合大学の完成を最終目標と致しますが故に、京都産業大学と命名しました。

今や大学は青白きインテリの立て籠もる象牙の塔であってはなりません。現実の産業界と密接な連携を保ちつつ、理論と実際との融合した教育に依って、卒業後直ちに実社会に役立つ実力を身につけ、日本の将来の産業界を双肩に荷負うて立つ、そういう自信に満ちた人材の育成が、本学の使命であります。

- 私（若泉）は、新入生諸君にこれからの4年間を充実したものとするため、5つの心構えを提案したい。是非とも真摯に実行して貰いたいと願っています。

1. 目標を持つこと
2. 積極的に行動すること
3. 自主独立の精神で臨む
4. 自分の生き甲斐を持つ
5. 理想を持って 夢を持って

- 若者は、現状に甘んじてはいけない、満足してはならない。

社会の変革を担うのは、いつの時代でも若者であり、若者のエネルギーに依って社会を動かしていくのです。

今の社会を変えなくては、21世紀の展望はあり得ないといえましょう。

- 前述の5つの提案に加えて、6の実践課題を投げかけたい。

1. せめて今日一日、テレビを消して良書に親しもう

1 週間に1度でもいいから、のんびんだらりと見ているテレビのスイッチを消して、読書に集中してみよう。読書は、自ら行う主体的で能動的な“対話”であり、誰でも一人で実行できる生涯の“学習”なのです。古今東西の古典（良書）に親しむことが大事。そして生涯において、座右の書となり、かつ我が子に伝えることが理想です。

2. 電話の使用を止めて、ペンを執ろう

便利な電話から離れて、しっかりした手紙なり文章を書こうということです。

書くことは、読むこと以上に何倍もむずかしい。だからこそ、できるだけ正しい日本語で自分の考えや感情を記述し、表現する精一杯の努力は、文化の本質に迫る最も基礎的で創造的な行為といえるのです。

3. マイカーには乗らない

クルマであくせくする代わりに、心にゆとりを持ち落ち着いて考える時間を持って、有意義に過ごすことが大事です。

クルマは移動の手段であって、遊びの道具ではなく、奢侈に流れる学生には所有を戒めたいものです。

4. 手作りの旅をしよう

学生時代であるからこそ、知らない土地を探訪し、多くの見聞を広げるチャンスといえます。

旅行代理店の既成の「パック旅行」ではなく、自らが創意工夫して色々と計画することが大事であり、旅をすることで想像力の創出が生まれてくるのです。

5. 恋愛をしよう

異性に関心を持つことは、若い学生ならば自然の成り行きです。健全な精神をもって好意を相手に伝えることは簡単ではありませんが、一生懸命に努力することにより、人間的に大きく成長するのです。

6. 日付のはいった手帳（備忘録）を持つ

その日の感動したこと、感想や大事な出来事などを簡潔に記録しておくことが大切です。計画をもって日々を送ることが重要（手帳で自己のスケジュール管理をする）であり、数年が経過すれば古い手帳を再度紐解き、自分の成長の過程を発見することが出来るのです。

手帳よりも、文字量の多い「日記帳」を日々付けることが出来るならば、なお結構です。

- 私（若泉）は、新入生諸君に提言したことがらを諸君が一つでも、二つでも自主的に実践し、「我が人生、いかに生くべきか」を熟慮しながら倦まず弛まず、「悔いのない学生生活」を送って欲しいものと心から願っています。

〈若泉 敬先生 53 歳 記録：吉村 信二〉



京都産業大学追分寮で熱く語る <若泉 敬先生 54 歳 吉村 Pt. 撮影>

講演会演題「京都産業大学生としての自覚」

—大学生活を有意義に過ごすために—我が人生、いかに生くべきか」

1984(昭和 59)年 5 月 23 日(水) <男子寮：250 人収容>



京都 鴨川畔 東華菜館で恒例の「クリスマス会」＜若泉 敬先生 61 歳＞
1991(平成 3)年 12 月 9 日(月) 〔純北京料理：四条大橋西詰〕
＜吉村信二 41 歳・玲子 38 歳・真由美 13 歳(中 1)・信哉 9 歳(小 3)＞



京都産業大学を去る前夜 幾星霜を追想して <若泉敬先生 62 歳・吉村信二 42 歳>

京の老舗すっぽん料理「大市」(元禄年間創業)で 1992(平成4)年3月30日(月)

・若泉 敬先生 万感のおもいを込めて「一献歌」を詠じる

<男の酒の 嬉しさよ 忽ち通ふ 意気と熱 人生山河 陰しくも
君 盃をあげ給へ いざ吾が伴よ 先づ一献>



さらば京都産業大学 思い出深い学舎を背にして <若泉 敬先生 62歳 吉村 Pt. 撮影>

・1992(平成4)年3月31日(火)付で京都産業大学を依願退職

次代を担う学生のためにと願いを込めて 退職金全額を京都産業大学に寄付する

・「天地の闢けし時ゆ ^{あめつち ひら とし} 神々の鎮まりませる…」京都産業大学学歌をくちずさむ

<学歌> 荒木俊馬 作詞・團 伊玖磨 作曲

吉村 信二様

平成四年四月二十二日

若泉 敬

度々御郵重な御芳翰を頂戴し、永く想ひに
なる写真、そして有益な「資料」の数々を御恵送賜わり
大兄の御高配詢に有難く、篤く御禮を申し述べます

四月五日付のお手紙を繰返し拝読し、大兄の
御愛情が吾が胸を打ちます、誓いそのお気が一みじ
み傳わってきます、大兄とあくまで信頼し、将来を大
いに期待して止みません

若泉 敬

私の方は今は身の整理（人生の思入りの換わりを精神的
意味も含めて）に追われて、お礼がいつまでも延び（マーズ
が、元気ですので御放心下さい、（マーズはマーズ）
ですー。

二月三十日の心算（マーズ）は忘れられません、私の不
来なスナブを記念にお収め下さい、この大兄の愛情がす
べてを語ってくれ、私もとても嬉しです

四月十八日は御令息の立派な御成長を念じて、マーズ
御家族の皆様にくれ／＼も宜しく御礼申下す、

何と不意

若泉 敬

「伝心の書簡」 <若泉 敬先生 62歳>

1992(平成4)年4月23日(木) 消印あり

- ・同志に「熱き心」を伝えんとする 温容と硬骨の玉章
- ・文中の「ライフワーク」とは 畢生の著作『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』の執筆



川魚料理「溪流荘」に遊ぶ <若泉 敬先生 62 歳 吉村 Pt. 撮影>

福井県南条郡河野村奥河内 1992(平成 4)年 8 月 12 日(水)

・ 1992(平成 4)年 3 月 31 日(火)付で京都産業大学を依願退職

次代を担う学生のためにと願いを込めて 退職金全額を京都産業大学に寄付する



川魚料理「溪流荘」に遊ぶ <若泉 敬先生 62 歳 吉村 Pt. 撮影>
福井県南条郡河野村奥河内 1992(平成 4)年 8 月 12 日(水)
・若泉 敬先生は緑陰 蟬時雨 川音の中で 竹酒に微酔・美酔



川魚料理「溪流荘」に遊ぶ <若泉 敬先生 62 歳・吉村信二 42 歳>

福井県南条郡河野村奥河内 1992(平成 4)年 8 月 12 日(水)

・語り尽くせぬ山川草木の清談 23 年前の師弟の出会いから今日までを想起して

吉村 信二様

山谿に心の朋と遊ぶ盛夏のひとつき、
山の幸よし酒またよし
人生の楽しみこれに過ぎず

平成四年葉月

若泉 敬

若泉用箋

伝心の書簡 <若泉 敬先生 62歳>

1992(平成4)年8月14日(金) 消印あり

・川魚料理「溪流荘」での楽しい一時 <8月12日(水)> に 熱きおもいを込めて



郵便はがき

606-□□

京都市左京区
修学院
水上町ハ一四
吉村 信二様

福井県鯖江市
つし 九一十三
若泉 敬

立春を迎え、福井も
漸く厳寒を越えたよう
気がしますが……その後
大兄はじめ御家族の皆様
お障りございませんか
益々の御健勝と御発展
と、とりわけ大兄の御金役
只腎新念して居ります
先日は御芳翰並びに
有意義な資料御惠送下
さいまして誠に有難うござ
います

「伝心のはがき」その①(オモテ) <若泉 敬先生 63歳>

1994(平成6)年2月9日(水) 消印あり

一粒の麦が
 地に落ちて
 死なない
 なら
 ただひとつのまま
 残る
 しかし死ねば
 多くの実を
 結ぶ

いままた私は新渡戸稲造の
 『武士道』と読み返して
 御存知の如く、その一九〇五年版
 緒言（ウィリアム・グリフィスに
 福井と縁の深い人）に
 この言葉が見られます
 聖書の言葉が
 私は相変わらず遅れている
 “ライフワーク”の完成を公刊を急
 ぎその仕事に没頭するが、
 我が人生の仕上げに
 深く考えざるを得ない
 昨今
 であります

ヨハネ 12:24

「伝心のはがき」その①(ウラ)

- ・『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』＜1994（平成6）年5月15日第一刷（榊文藝春秋）の公刊近い頃
- ・ライフワークである同書は 若泉 敬先生の「信念と覚悟、義心と無私の精神」によって描かれている



お気に入りの作務衣で教え子と 夕暮れの街をのぞむ <若泉 敬先生 63 歳・吉村信二 43 歳>
福井県鯖江市下新庄 1994(平成 6)年 3 月 19 日(土)

吉村 信二様

十二月二十日

若泉 敬

御省 御覧下さい

先般は御鄭重な長文の御書翰を戴き、誠に
意義深く拝読いたしました

かえりとも懐しくお返し、そして皆さんから
これ心温まるお便りを頂き、わがことのようにみな
嬉しく感じました（お返事が出来ず一たしお返りさせ
下さい）

早速御禮状を差し上げるべく、日夜「うん

うん 敬 用 意

うん」の完成に「没頭」してまいり、今日になって
しなやか一た、お返り下さい（今年は年末年始迄に
最善を尽くすつもりです）

また週日はお一人の御蔵書と御趣き給わり
御実家からも特産品を添え、お贈り極め、書く
御禮を申し述べます

よく押しこまり寒くなりまいだが、貴兄御来事
吳々も御自愛書にて、御家族の皆様お揃いで
佳き新年をお迎えになられますよう、そして一九九四年
の御健勝と御発展と一向お祈りして止みません

何となく

「伝心の書簡」〈若泉 敬先生 63 歳〉

1993(平成 5)年 12 月 21 日(火) 消印あり

- ・『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』〈1994(平成 6)年 5 月 15 日第一刷 (株)文藝春秋〉の公刊近い年の暮れ
- ・ライフワークである同書は 若泉 敬先生の「信念と覚悟、義心と無私の精神」によって描かれている

他策ナカリシヲ
信ゼムト欲ス

若泉敬

「知っているのは四人だけ」

ニクソン、佐藤栄作、キッシンジャー、若泉

両国外務当局者をすべてはずし、
ホワイトハウス大統領執務室に隣接する小部屋で、
極秘裏に交わされた沖縄返還・日米首脳交渉

「秘密合意議事録」とは何か？

文藝春秋

定価(本体2718円+税)

戦後史の空白部分の核心を衝く稀有の証言。

『他策ナカリシヲ 信ゼムト欲ス』公刊 <若泉 敬先生 64 歳 1994(平成 6)年 5 月 15 日第一刷 (株)文藝春秋>

・本書表題および書体は 国立国会図書館所蔵の陸奥宗光著『蹇々録草稿綴』に依る

・畢生の同書は 若泉 敬先生の「信念と覚悟、義心と無私の精神」によって描かれている

宣誓

永い遅疑逡巡の末、
心重い筆を執り遅遅として綴った一篇の物語を、
いまここに公にせんとする。

歴史の一齣への私の証言をなさんがためである。

この決意を固めるに当って、

供述に先立ち、

畏怖と自責の念に苛まれつつ私は、

自ら進んで天下の法廷の証人台に立ち、

勇を鼓し心を定めて宣誓しておきたい。

私自身の行なった言動について

私は、

良心に従って

真実を述べる。

私は、

私自身の言動と

そこで知り得た事実について

何事も隠さず

付け加えず

偽りを述べない。

右、宣誓し、茲に署名捺印する。

一九九三年（平成五年）五月十五日

差泉

敬


鎮魂献詞

一九四五年の春より初夏、

凄惨苛烈を窮めた日米沖縄攻防戦において、

それぞれの正義を信じて散華した

沖縄県民多数を含む

彼我二十数万柱の総ての御霊に対し、

謹んで御冥福を祈念し、

この拙著を捧げる。

謝 辞〈一部抜粋〉

顧みるまでもなく、私の責任は重い。

その重みは常に私の深層心理を支配してきた。「沖縄慰霊の日」(六月二十三日)などふと夜半に眼を醒まし、その地の同胞とそこに眠る無数の英魂を想い、鋭利な刃で五体を剔^{えぐ}られるような気持ちに襲われたことすら一再ならずあった。それは、多分に運命のなせる業とはいえ、国家の外交の枢機に与^{あずか}ってしまった私が歴史に対して負わなければならない「結果責任」である。

この事実による拘束から、どのようにしても逃れるわけにはいかない。本著作の刊行は、私が歴史に対し責任を負うことを公然と自らに課し、かつそのことを改めて確認するための営為に他ならない。

その結果として生じるであろう事態に対しては、私自身いついかなる場面にも真正面から対峙し毅然として責任を執るだけの勇気と覚悟を今ここで自らに課しつつ、跪^{きはい}拝してこの「謝辞」を結びたい。

跋

ここで敢えて私の一片の赤心を吐露させて頂くならば、敗戦後半世紀間の日本は「戦後復興」の名の下にひたすら物質金銭万能主義に走り、その結果、変わることなき鎖国心理の中でいわば「愚者の樂園」^{フールズ・パラダイス}と化し、精神的、道義的、文化的に「根無し草」に堕してしまったのではないだろうか。もしもそうだとするならば、このような「悲しむべき零落」から再起し、国際社会での生存要件たるそれ相応の信頼と尊敬を受けるために、今の日本と日本人に求められている内なる核心的課題とは一体何なのであろうか。

一言にして言うならば、それは、ホイットマンの魂の琴線を揺さぶり、「世界的日本人」新渡戸が一世紀近く前に訴えた、あの「真の武士道」の伝統に深く念^{おも}いをいたし、それを明日の行動の指針とすることではないだろうか。

そこには、衣食足って礼節を知り、義、勇、仁、誠、忠、名誉、克己といった普遍的な徳目が時空を超えて静かな輝きを放ち続けている。その不滅の光芒の中に、私は、戦陣に散り戦火に斃れた尊い犠牲者たちが、彼らの祖国とその未来を担う同胞^{はたらち}に希って止まない「再独立の完成」と「自由自尊の顕現」を観るのである。

心眼を開き、心耳を澄ませば、私の魂の奥深く静かに喚びかけてくるこの人柱たちの祈りの声を、私は、否、われわれは、これ以上黙殺してよいのだろうか。

「鎮魂献詞」、「宣誓」、「謝辞」で始まるこの拙著の公刊を、「永い遅疑逡巡の末」ここに決断するに至ったのは、まさに私のその塞^せぎ止め難い想念のなさしめる業^{わざ}に他ならない。



郵便はがき

606-□□

京都市左京区
修学院水上田町
ハ―四
吉村 信哉様

〒816 福岡県鯖江市
つっじ丘九―十三
若泉 敬

寒中御見舞申し上げます
「武士」からの賀状、たいへん嬉しく
判見しました、昨年送って頂い
た御家族のお写真のなかで、「眼の
輝く信哉君」は素晴らしい大奴
才です、新年は大いに「挑戦」し
て下さいね
神戸一帯を襲った今回の大震災
は、水と安全はタダと驕り浮かれて
フルボッコパンダイス
「愚者の楽園」に対する神様の
怒りと警告があり、と私は受け留
めています
衣食足って礼節も知り、世界か
ら尊敬されるサムライになるって下さい

阪神淡路大震災に思う 「伝心のはがき」その②(オモテ) <若泉 敬先生 64 歳>

<地震発生 1995(平成 7)年 1 月 17 日(火) AM5:46>

1995(平成 7)年 1 月 22 日(日) 消印あり

一粒の麦が

地に落ちて

死なない

なら

ただひとつのまま

残る

しかし死ねば

多くの実を
結ぶ

御両親様、お姉さんにもくねれ
宜しくお伝え下さい

H99

雪の鯖江から、お父さん^{スミシ}の

御健康と御家族の皆様^{スミシ}の益^{スミシ}の

御発展をいたすお祈りして

おります

世界を見ると戦争、飢餓、憎悪

などで難民も多く沢山の人が苦しん

でいます、神戸大震災で改めて痛感

したのは、神様は日本国民全体の生

方にお怒りになつておられるので他人

事では無いと思ひます、私たち一人一人

が^{ヨハネ12}もつたいたいという心と言葉を²⁴選
らせ、感謝と我慢の精神を持ちたい
と希つています

阪神淡路大震災に思う 「伝心のはがき」その②(ウラ)

- ・長子の吉村信哉(12歳・小学6年生で春からは中学生となる)へ真情を綴った
- ・赤心を以って 戦後社会の病弊^{ていつ}を剔抉し「真贋」を問い質している



若泉ご夫妻 沖縄の「白梅之塔」に鎮魂の祈り
 〔若泉 敬先生 1930(昭和5)年3月29日生まれ・42歳〕
 〔若泉ひな様 1930(昭和5)年8月13日生まれ・41歳〕
 1972(昭和47)年6月23日 <同年5月15日 沖縄復帰記念式典>

生あるかぎり全精力を
 生ける精神をもって
 ゆるぎない仕事の中で
 死ぬる。

花見な花のうつり
 雲も恋のまわが
 まわがまわが

謹啓 生前御懇情に与りました妻ひな様は、昭和六十年六月二十三日忽然長逝いたしました。その残務処理をしていましたところ、彼女が弁護士として毎日肌身を離さなかった『訟廷日誌』の昭和五十年年度版最後のページに、上記自筆の書き込みを見つけました。

想えば、正にこの文字通りの妻の人生でございました。

茲に、貴台はじめ皆様より賜りました御厚誼を偲びつつ、改めて御禮を申し述べる次第でございます。

末筆になりましたが、貴台はじめ皆様方の御健勝と御多幸をお祈り申し上げます。

昭和六十年暮夏

拝具

若泉 敬

<若泉 敬先生の手記 55歳>

若泉ひな様は 福井師範学校卒 明治大学に学び福井県初の女性弁護士として東京・福井で活躍された <享年 55歳>

冠省 御免下さう

昨夜も電話でずいぶと話したが、會つておじ
さんのお晴しい「フレンチ」に御禮を申し述べよう
早速 使用させてもらえ、大兄と仰びます

お約束した「資料」、とりまけて名をお届けします
御精進御熟考なされれば幸いです、獨私信は
大兄限りということ、取扱いは厳重に申注意致します

同封した二つの南稿にみられる日本の現状認識、
展望を基本的には共有する私の光がラジカルに

なると信じていること、向岸御賢察御海容下さう、
私は必要ならばいつでも我が「余命」を捧げる準備が
出来ています

我が敬愛し、信頼し、期結する大兄が教育者とし
て、私を捨て、その使命を果たせて下さること
（向岸わがにはいられませんが）、これからの日本に求められ
ているのは、世界に立派に通用する地球人としての素の
人物、人材であります

先週、「都庁」満十五年の記念日を春帆楼で迎え

私の、松陰、龍馬を中心にした「維新の大魂」を訴ねる
旅は、誠に意義深いものでありました、は静かに深く
考えこんでいるところです

何となく

平成七年四月三日

若泉 敬

吉村 信二 様

「伝心の書簡」 <若泉 敬先生 65 歳>

1995(平成7)年4月3日(月) 消印あり

・人をふる里を 国を愛する全生涯 「不撓不屈の精神」が伝わる



若泉 敬先生ご逝去 1996(平成 8)年 7 月 27 日(土)午後 2 時 50 分 享年 66 歳
 ・「七回忌の総山墓苑」(吉村 Pt. 撮影) 福井県鯖江市下新庄 2002(平成 14)年 7 月 27 日(土)
 ・地球儀を象った墓石「志」の左隣りに ひな枝奥様の歌碑(黒御影石に自筆刻む)が寄り添っている
 「生あるかぎり潑刺と 生ける精神をもって 働らきつゝけ仕事の中で 斃れる。花見れば花のうつくし 雲ぞ恋しき わが生きをりて」

日刊福井※「正言」 1980（昭和55）年12月27日（土曜日）

若者よ、怒りと夢を持とう

― 新年を迎えるための一提言 ―

京都産業大学教授 若泉 敬

「いま時の若い者は…」と言って、大人たちは何時の世代でも次代を担う青少年に期待を秘めた批判の眼を向けてきた。いわば順送りの陳腐な台詞ともいえようが、果してそう単純に割切ってしまつてよいものだろうか。

先般発表された『青少年白書』が描くわが国の現代若者像は、少し悪く言うところ、甘ったれで消極的、個人の趣味を第一に今やりたいことをエンジョイし、のんびり暮せばそれで満足だという。

保守的、現実的、自己中心型の享楽指向というややっしらけ、た、おとなしい、小粒な青年たちのイメージが強い。

この白書に引用された総理府の「青少年意識調査」の設問にはかなり問題点があるにしても、筆者が日頃接している大学生諸君から受ける全般的印象とそう喰い違っていない。

もしこの分析が基本的に間違っていないとしたら、このような諸君に託す来べき社会共同体は、そして日本の将来は一体どういうことになるのだろうか。

何か寒々としたものが脳裡に去来する筆者は、「青少年に夢を与えるのは誰の責任か」と題した本紙社説（十二月十三日）を強い共感をもって読み返した次第である。

旺盛な好奇心、純粋な慧眼、豊かな感受性、感動と情熱等をその特権とするはずの青年たちが、矛盾に満ちた現実に対

する鋭い批判精神（怒り）を失い、瞳を輝せて理想（夢）を語ることを止めた時、その社会と国家が如何なる命運を辿ったか、文明興亡史の教訓は明かなように思われる。

しかし、ここで篤と考えてみたいのである。果して、われわれ大人が今日の青少年を徒に批判し、彼らを本当に責めることが出来るであろうか。

思うに、所詮、若者の意識と行動は親の生き方の反映であり、大人自身の自覚と実践の所産ではないのだろうか。

飽食暖衣の青少年が礼節を知らず、平和ボケで愛国心が稀薄だといった調子で慨嘆する前に、念を致すべきはいま社会に責任を負っている大人たち自身の行動ではあるまいか。

当面わが国内政の最優先課題である「財政再建」を例にとってみよう。多くの識者が、いま抜本的な施策を講じない限り財政の破綻のみならず、やがて国家的破産状態が到来するのは避けられないと言う。

国債依存の現状を譬えてみれば、既に家族全員が一人当たり約七十万円の借金を抱えた上で、月収二十六万円のサラリーマンが、サラ金などから借金して月々四十二万円の生活を続けているようなもので（本年度国家予算の一般会計歳出入比）、一体今後どういうことになるのか。そのうち借金取りに追い廻される

「サラ金地獄」に堕ち、最後は一家心中の悲劇すら起りかねない。

この嵩む借金の膨大なツケを次の世代に廻わして、もし大人たちがきょう一日の奢侈安穩を貪っているとしたら、今の若者が批判的になるのはむしろ当然であろう。

「今日の日本は、青少年にとって努力のしがいのある社会か」という設問（『青少年意識調査』に肯定的に答えた者が三分の一しかなかったというのも、残念ながら、理解できるところだといわねばなるまい。

眼を世界に転ずると、国際環境は一段と厳しく、かつて筆者が本欄で論じたように（本年七月七日付）、『日本丸』の進路は確かでなくかつその舵取りは容易なことではない。

国民のコンセンサスを得た国家目標が不在で、従って平和のための国家戦略も策定できず、それを求める本格的な問題提起すら行われていないのが実状ではあるまいか。

国際社会において自国の生存条件を確保し、そこで果す日本の役割や貢献といったことについて、本質的に観れば、国のめざす理想が不明確なことが問題なのである。

こうした内外の状況のなかで、どうして若者が未来を生きる夢やロマンを抱くことを期待出来ようか。この意味では、かかる事態を招来した為政者をはじめとして日常性に埋没してきた大人たちの責任は重い。

敢て言うならば、むしろ青年が怒りを発し、公憤を感じて然るべきであろう。

過ぎゆく年を静かに顧みてここに筆者自身の率直な省察を述べると共に、新しい年を迎えるに当って青年諸君に真摯に

訴えたい。

それは、前述の青年の特権を回復し、毅然とした自我の確立をめざし、若々しい情熱を漲らせながら「わが人生、如何に生くべきか」という永遠のテーマに意欲的に取り組んでもらいたい、という希いである。

日刊福井※「正言」 1981（昭和56）年8月15日（土曜日）

魂をなくしたか、日本の繁栄

― 静かに国の将来を考えよう ―

京都産業大学教授 若泉 敬

「わが国の躍進と繁栄を絶讃した上で」、だが、このような目覚しい発展にもかかわらず、今日の日本人は心理的に哲学的に根なし草のようにさえ見える。過去と全く結びつかず、未来に対しても無関心で、まるで現在に酔っぱらっているみたいだ。

日本に精神的基盤が無いことは問題である。国民を団結させ、国家目的を確立させるのに重要な働きをした伝統が崩れてしまったのである。

日本は第二次世界大戦で軍事的に敗北した時、道徳的にも降伏してしまった。日本は魂を失っている。

その意味で、鉄骨は天空に聳え、ネオンは夜空に輝こうとも、何かしらいたましいものがある。人々は物をつくるのにあまりに夢中で、個人のそして国家の運命を考える暇がないのではないかとさえ疑われる。」

これは、一九六四年わが国を訪れた米国のすぐれたジャーナリストでかつ思想家でもあるノーマン・カズンズ氏が『サタデイ・レビュー誌』に書いた日本印象記の一部要約である。

近來夥しい『日本論』が内外で氾濫するなかで、早くして問題の本質の所在を鋭く指摘した彼のこの一文は、筆者の脳裡に焼きついて離れない。果して、われわれは物質的繁栄を謳歌しながら、その代償として魂を失ってしまったのだろうか。

か。

毎年暑い夏がやってくると、深い感慨が筆者の胸中をよぎる。恐らく同世代の人々に共通して言えることだろう。三十六年前の七月十九日福井空襲の惨禍に会い、旧盆の本日、未曾有の敗戦を迎えた。時に十五才、私にとってそれは、価値観のコペルニクスの転回を含む怖るべき大衝撃だった。当時は判断力も未熟で、そもそも何が起ったのか、何故こういうことになったのか、容易に納得はいかなかった。

今静かに顧ると、国の命運に拘るこの体験が私のささやかな人生を決定づける原点となった。全国主要都市が焼野原と化した、その一角に茫然と佇みながら、「こんな戦争を二度と繰り返してはならない。これから日本はどうしたら立ち上がれるのか、そして進むべき途は？」。よし、広い世界に出かけ、天下の大勢を見ながら日本の生き方をじっくり考えてみよう」と志を立てた。

爾来、国際的日本人をめざし、国際政治の研究と実践に打ち込んできた次第である。ここで、私的回想にふれたことをお赦し願いたい。

八月十五日を迎えることは、わが国にとって、そして多くの日本人にとってそうであるように、筆者個人にとっても特別の意義をもっているからである。

「過去を振り返ることは、将来につい

て責任を担うことである」とは、先に来日されたローマ法王の箴言である。

正に然り、今日われわれが過去を顧るのは、単なる懐旧ではなく、これからの日本について責任を担う意志を再確認するためである。仮にも、カズンズ氏の觀察通り、今の日本人が「現在の繁栄に酔いしれて、国の運命を考える暇がない」とすれば、それは単に「いたましい」ことに留まらないであろう。

自ら努力して築いた繁栄を享受することとは、もちろん結構なことである。それを肯定した上で、敢て自問したい。それだけでよいのだろうか。それはこのまま永続するのだろうか。

更には、人はパンのみでは生きられない以上、物質的繁栄は所詮、個人にとっても国家にとってもそれ自体で真の生き甲斐や究極的目的とはなり得ないのではあるまいか。

管見をもつてすれば、人間の幸・不幸は物質的豊かさでは計量できず、また人間の物欲には際限がない。放置すれば、消費万能思想、拝金主義、エゴイズムの肥大化等を蔓延させ、過去の文明興亡史が示すごとく、その社会を内部から蝕みやがて衰亡へと導くであろう。

加えて、対外依存度の著しく高い「ひよわな花」日本の繁栄を引き続き可能ならしめる国際的諸条件は脆弱な上に、最近の現実はいよいよ厳しい。世界の緊迫した情勢は、とても日本だけ太平洋の鼓腹撃壤を許すような状況ではない。

われわれは何を為さねばならないのか。数多くの国家的課題のなかで、筆者は本欄でも何回か最も基本的な問題提起を試みてきた。

即ち、第一に、国民の英知と創造力を結集し、二十一世紀に向けての新世界秩

序形成をめざす日本の国家目標と政治戦略を再構築すること。そのことは、「無関心」、「根なし草」、「道徳的降伏」と訣別し、日本人の新たな「精神的基盤」の確立をも意味するであろう。

第二に、期待されているわが国の国際的役割や貢献について、必要で可能な最大限のことを、たとえそれが自己犠牲を伴っても実行すること。相互依存の昂まる世界で、民主主義の「経済大国」日本は意義深い寄与をなし得る一方、もし逆に、孤立化したら生きて行けないことは明白である。

孟蘭盆は、祖先の霊を慰めその冥福を祈る日である。同様に、この日われわれは祖先たちが築き上げた伝統に還り、静かに祖国の命運に念いを馳せ、その将来に責任を担う自覚を新たにしなければならぬと思う。

このことこそが、戦争の尊い犠牲となったすべての人々とその遺族たちを偲び、戦没者を追悼する最善の鎮魂ではあるまいか。

戦争と平和

― 求められる二重の忠誠心 ―

京都産業大学教授 若泉 敬

幸いにも日本は平和である。国内には天下泰平ムードが流れている。しかるに、外では血腥い局地戦争がこのところ世界各地で相次ぎ、テレビや新聞が緊迫した重苦しいニュースを生々しく伝える。

この厳しい国際情勢を凝視しながら、筆者が最近静かに考えたこと、深く考えさせられたことを若干述べておきたいと思う。

戦争と平和―人間の五千年の歴史を彩ってきたこの原罪のテーマは古くして常に新しい。しかも戦争は核・ミサイル兵器の現代において、人類の存亡にかかわる死活的な重要性を帯びてきた。

歎かわしいのは、戦争の舞台となつてゐる国際社会が、いまだに極めて未開発の幼稚な発展段階にあることである。極言すれば、それは「ジャングルの法則」が支配する弱肉強食の世界である。

地球上百六十にもおよぶ独立国家が、国の大小を問わず対等同権で、国家の主権は最高にして絶対なり」とフランスの学者ジャン・ボードンが四百年も前に下した定義に固執して譲らないとは驚くべきことである。

領土の侵犯、主権の侵害、独立への脅威は一瞬にして民族感情に火をつけ、ナシヨナリズムはその国民を熱狂的に駆り立てる怖るべき魔力をもつ。

二十一世紀を目睫にして、国際社会は大いなる矛盾を孕み、世界史の危機的な

一大転換期を迎えている。過去と未来、現実と理想のギャップに見られるこの大いなる矛盾とは何か。そしてわれわれは如何に対応すべきか。

人間の好奇心の所産である知識や技術は飛躍的に「進歩」した。情報、通信、交通、運輸手段等の革命的な発展によつて、われわれは現在、物理的にも心理的にもますます小さくなったこの惑星上に住んでいる。

いわば、四十六億人が「宇宙船地球号」に乗組んだ一種の運命共同体となりつつある。いまやいかなる国も単独で孤立してその生存を完うすることはできず、持ちつ持たれつの相互依存性は昂まる一方である。他人事ではない。

平和な国際環境下での通商立国を指向する日本にとって、自国の安全と繁栄を確保するためにこのことは明らかに望ましい趨勢であり、必要な基本条件であると言えよう。

だが問題は山積している。際限なき軍拡競争と核時代の安全保障、自然破壊と環境保全、涸渇する資源とエネルギー、人口爆発と食糧欠乏、構造的破綻に瀕する全世界経済、懸隔と対立が激化する南北問題、海洋と宇宙の開発と争奪、宗教的対立と人種感情等々、これらはどれ一つとってみても、一国で取組むにはあまりに巨大な挑戦でありかつ複雑深淵なる課題である。

この歴史的挑戦に適切に対応するため、今日、新しい哲学が、秩序原理が、そして世界観の創造が切実に希求されている。グローバルな規模での真の国際協力が不可欠である。

そして、さまよう亡霊とも称すべき国家主権の絶対性を超克する「新しい世界秩序」が真剣に模索され、速かに劃期的な前進がなされなければ、われわれの未来への展望は決して拓かれないであろう。世界のすぐれた思想家や指導者は、夙にこのことを洞察し認識している。

にもかかわらず、当面する大矛盾は克服されるのではなくて、むしろ拡大しかえって深刻化しつつあるのが実態ではあるまいか。現在、国連特別総会で取り上げられている軍縮問題の一つを觀ても、悲劇的な歴史の経緯がこのことを立証している。

人類の未来を、こうした状況が続く限り、バラ色に描くことができないのは一人筆者のみではないだろう。

ここで想起するのは、いまは亡き英国の文明史家アーノルド・トインビー博士の予言である。晩年の一九六〇年代、筆者はしばしば博士の警咳に接した。

よく今世紀最高の歴史家といわれるトインビー博士は、二十一世紀初頭に人類が直面するであろう二つの選択肢として、一つは核戦争によつて自らを滅亡させる可能性、他の一つは、より小さい悪として人類が「世界的独裁制」に屈服することであると予測した。

もちろん、二つとも断じて望ましいものではない。したがって博士は、最善を尽して「第三の道」を探索しなければならぬことを真摯に訴えられた。

その方向性を示唆するものとして、博士の次の言葉はいまもって筆者には極めて

て印象的で、脳裡に鮮烈である。

「今日、全世界のすべての人々に二重の忠誠心（dual loyalty）が求められています。」

第一は、自分が生れ育った祖国への自然な忠誠心であり、いま一つは人類全体の生き残り、安全、福祉のための理想的な忠誠心です。

前者は多分に感情的であるために、偏狭で盲目的な愛国心に陥らないようコントロールしながら、われわれが意図的に開発すべき後者との適切な調和と両立を図ることに、英知と想像力を傾注しなければなりません。

根源的には、人間の自己中心性を克服する精神革命が必要でしょう。ただ、心配なのは、残された時間がもう余り多くないということです。」

眞贋を見抜く眼光

——小林秀雄氏を偲んで——

京都産業大学教授 若泉 敬

ドイツで戦後三十八年振りに「発掘」されたという『ヒトラーの日記』（六十冊）が、果して本物なのか偽物か、先般来世界の歴史家や専門家の間で派手な眞贋論争が捲き起っていた。

西独の政府当局が偽造との鑑定を下して結着がついたかにみえるが、まだ多くの謎が残っている。仮にも本物だったとすれば、その史料の意味や社会的影響が小さくないだけに、ジャーナリストイックな興味本位では済まされない問題である。

この「事件」から、筆者が改めて想いを致したのは、今年三月一日に逝去された小林秀雄氏のことだった。

それは何故か。本物を命懸けで求めてやまなかった氏の凄まじい「生きざま」に、私自身が切実な印象を受けているからである。

この昭和を貫く思想界の巨人を悼んで、新聞雑誌等では「文学の神様」とか「批評の教祖」などと大きく扱われ、既に語り尽くされている感すらある。にも拘らず、敢てここで筆者の邂逅を述べてみたい。

今日出海氏（作家、初代文化庁長官）からある機会に小林秀雄氏を紹介されたのは十数年前のことだった。それからパーティなどで何回か顔を合わせ挨拶することはあったが、凡そ文学や芸術に疎い筆者が特に親しくなるということはない。

かった。告白すると、当時の私は氏の不朽の業績について何一つ知らなかったと言ってもよい。

ところが、思いがけないことが起った。創立間もない「日本文化会議」の理事会が東京新橋の第一ホテルで開かれ、終ったのが午後六時頃、その時小林氏が片隅の私の方に歩み寄られその晩の夕食にと誘われた。昭和四十三年七月五日のことである。列席の田中美知太郎、林健太郎、福田恆存、三島由紀夫氏ら錚々たるお歴々十余名の中で、何故私一人に声を掛けて下さったのか、今もってよく判らない。

案内されたのは銀座の小さな寿司屋「きよ田」で、氏の最良の店らしい。カウンターに並んで座り、氏は最初のうち黙々と独酌、やや酒が廻るにつれてぼつぼつ話が始まった。まず食べ物のこと。私の方は特に話題もなく、聞き役だった。

「君、旨いかね」と言われ、「はい」と返事をしたら、「この親爺はなあ、もう今の時代は駄目だ、こんない加減な種で本物の鮎が握れるか」と怒って隠居しちまった。だからいま、この息子がやってるんだ」と眼前の若主人を紹介された。それから氏は、次第に滑らかな口調で、今は少ないが昔は本物があつたという話をした。鮎に限らず、鰻ならどこ、天麩羅ならあそこ、鮎は、蕎麦は、と具体的に店の特色や板前の気質に及び、「偽物

は、わたしの舌を決して誤魔化せないよ」ときっぱり言い切った。

「いや、喰い物や酒だけでない。何でもそうじゃないか。これだけ偽物が多くなっちゃ、嫌な世の中だよ」と氏は不機嫌な横顔だった。（ニセ物は減らない。ホン物は減る一方だから、ニセ物は増える一方という勘定になる」と、小林氏は昭和二十六年執筆のエッセイ『眞贋』で述べている。）

話が弾んだ。こちらがいい気持になって盃を重ねていると、突然、「君」と隣の私を見据えて、「君はまだ若い、これから本物を相手にし給え。いいか、本物だけだ。」と、凜とした声だった。

ハツとしたその瞬間、氏の眼光には不可思議な力があった。すべてを見透かされているようで怖かったが、その背後にある情を、同時に私は感得した。

この一言が耳朶を打った。爾来、氏への感謝の念と共に私の脳髓に焼き付いている。

つい先日、桜も散った京都で、六十有余年の心友を喪つて沈痛の今日出海氏とお会いし、一夕追憶談を伺って尽きるところがなかった。

「小林は、徹底的に自分の言葉だけで思索することの出来た稀有の人だった。その全生涯を、自分の眼だけで見て、見抜いて、自分の頭と心だけで考えて、見抜いて、考え抜いて生きた男だ。だから君、何事でも眞贋が見抜けたんだよ」としみじみ語られた。私は得心した。

冒頭で触れた『ヒトラーの日記』なるものの信憑性などより、そもそも肝腎のヒトラーとは一体何者だったのか。昭和三十五年に『ヒトラーと悪魔』と題する論稿を発表した小林秀雄氏は、その中で次のように書いている。

「ヒトラーは、首相として政権を握るまで、世界一の暴力団を従えた煽動政治家に過ぎなかった。……彼の人生観は要約する事は要らない。要約不可能なほど簡単なのがその特色だからだ。

人性の根本は獣性にあり、人生の根本は闘争にある。これは議論ではない。事実である。それだけだ。

簡単だからと言って軽視出来ない。現代の教養人達も亦事実だけを重んじているのだ。独裁性について神経過敏になっている彼等に、ヒトラーに対抗出来るような確乎とした人生観があるかどうか、獣性とは全く何の関係もない精神性が厳として実在するという哲学があるかどうかは甚だ疑わしいからである。ヒトラーが、その高等戦術で、利用し成功したのも、まさに政治的教養人達の、この種の疑わしい性質であった。」

ドイツにナチス第三帝国が成立して五十年目にあたる今年、小林氏のこの洞察と警告をわれわれは如何に受け留めるべきか、いまこそ自らの頭で考究してみることが必要なのではないか。

そして、偽物が横行する末世にあつて、眞贋を見抜く自らの眼力を養うためもつと真剣になるべきではないだろうか。

二十一世紀の日本

― 故ハーマン・カーン氏の予言に想う ―

京都産業大学教授 若泉 敬

「二十一世紀は日本の世紀」、いや、より正確には「そうであっても驚かない」と二十年以上も前に予言して日本人を驚かせかつ勇気づけた米国の未来学者ハーマン・カーン氏（六十一歳）が、今月七日、ニューヨーク州の自宅で急逝した。今春も、「この次日本に行ったら是非会いたい」との手紙を貰っていただけに、この悲報は筆者にとって衝撃だった。その後来日したヘイグ前国務長官（就任後カーン氏の主宰するハドソン研究所へ迎えられた）も、彼のユニークな業績と貢献を愛惜の情をこめて私に語った。

彼は文字通りの巨人だった。一四〇^{キロ}近い巨軀、人懐っこい大きな丸顔を包みこむ白髯、疲れを知らぬ多彩な活躍、機関銃のように早口でまくしたてる講演、その強烈な印象はまず一度会ったら忘れられない。日本では、大男、総身に知恵が回りかね”などと言うが、カーン氏の場合は全身がいわば知恵の塊で、古今東西の該博な歴史の知識と洞察力を駆使し、自ら開発した独得のシナリオ分析法に加えて、何ものにも囚われない自由奔放な発想から人類の未来と世界の展望を予言し続けた。

それは一貫して、強気の積極論であり、希望を与える楽観的なビジョンであったと言つてよいだろう。この点で記憶に新しいのは、一九七〇年代前半、『ローマ・クラブ』に代表される「終末論」的悲観

主義が流行した当時、彼は「世界には資源は十分ある。さらにそれよりもっと重要なことは、現在よりも多い人口と、現在より高い所得の人々を養うのに十分なだけの資源がこれから発見されるであろう」と断言して憚らなかつたことである。

一九六〇年、カーン氏は米ソ間の原水爆戦争の可能性を論じ、それが「文明の終焉」や「相互自殺」にならないと主張した大著『熱核戦争論』を公刊して、米国内外に大きな波紋を巻き起した。核戦争は正気では考えられない”とか、そのような可能性を考えること自体が悪徳だ”といった激しい非難も浴びせられた。それに対し彼は、「考えることが何故いけない」と聞き直つて、『考えられないことを考える』（一九六八年）という挑発的なタイトルの理性的著述を公にした。

それに序文を寄せたフランスの知性、レイモン・アロン氏は「戦争研究は、たとえどんなに好ましくなく、残酷不気味であつても、どのような熱核戦争が起こりそうかとか、いろんな攻撃を仮想した場合、物的損害や人的被害がどれだけになるか、などについて研究をすすめる必要がある」と喝破した。

確かに、カーン氏は通常の人が「考えられないこと」を、あらゆる観点や次元から考究した思想家であつた。時には一見奇想天外な発言もあつたが、「それが起る前に、歴史と取り組むべきだ」とい

うのが口癖で、使命感を秘めた彼の信条であつた。人柄も天衣無縫で、この天才的頭脳の前には何のタブー（禁句）もなかった。毀誉褒貶を全く意に介さず、彼はいつも全米を、全世界を駆け巡り、各界の指導者と討論し、貪欲な好奇心をもつて歩きながら考え、考えながらエネルギーギッシュに行動した。『閃き』が現実と結びつくとき、具体的な政策提言となり、アイゼンハワー以来レーガン大統領に至るまで、歴代のアメリカ大統領で彼の献策に直接耳を傾けなかつた人は一人も居ないと言われる。

カーン氏には多くの著書がある。日本については、一九七〇年出版の『超大国日本の挑戦』（英文原題は「勃興する超大国日本―挑戦と対応」と、一九七八年の『それでも日本は成長する』（『日本の挑戦―経済的成功の成功と失敗』の二冊がある。いま改めて通読してみても、鋭い問題点の指摘と意義深い示唆は今日なお有効性をもっているように思われる。

勿論、彼の予言で外れているものもあるし、納得が行かぬところもある。一時論議を醸した「日本核武装論」が、その一例である。彼は、一九六四年、ある国際会議の席上で「日本は一九七五年頃には、世界第六番目の核武装国になるであろう」との客観的予測なるものを公言し、同席した私と大いに論争したことがある。

しかし彼は、「この予言の正しさに確信がもてないばかりか、予言が誤つたものであつてほしい」とさえ思っている。『超大国日本の挑戦』と断っている。そして、その後この予言を修正した。

一九六〇年代から毎年何回か来日し、日本人の将来性を高く評価したカーン氏だが、彼の基本的日本観となると、日本が欧米に追いつくという過去一世紀間の

国家目標をほぼ達成してしまった現在、「追求すべきモデルがなくなり、日本自身がつくり上げた独自の海図もなく、日本丸は、経済的な面のみならず、社会的、政治的、文化的な面でも、目標を見失つて漂流し続けている」（『それでも日本は成長する』）と厳しく核心を衝いていた。

彼が強く期待した二十一世紀の日本の未来像は、「技術と自然美が結婚した脱工業化社会」として、全世界に対しよきモデルを日本自らが提示することであつた。そこに至る過渡期の問題点としては、「日本は今や経済大国として、それに相應しい行動が要求されている。今後は『広義の国益』を追及する必要がある、ビジネスの相手から最後の一滴まで絞り取るうとしてはなるまい」と警告した。

また世界の中で日本がその経済的、政治的役割を果たせるかどうかは、強いアメリカが存在し続け日米が相互連帯で真に協力し合えるかどうかに依存しているとの確信を力説してきた。

二十一世紀が日本にとって、カーン氏の予言した如く「希望に満ちた世紀になるか否か、それは多分に、われわれ日本人自身が『漂流』を止めて、世界の新しい秩序原理を構想し、そのなかで独自のビジョン＝国家目標を生み出せるかどうかにかかつている。

そのためには固定観念や禁忌を排し、未来に開かれたあらゆる可能性について「考えられないこと」をも敢て考える知的勇氣と雄渾な夢が必要ではあるまいか。これが、四半世紀にわたる親交を偲び、カーン氏の冥福を祈りつつ、いま筆者の胸をよぎる想いである。

心の安保条約を結ぼう

― 故今 日出海氏の提案 ―

京都産業大学教授 若泉 敬

会談の相手はヘンリー・キッシンジャー博士、場所はホワイトハウス（米大統領官邸）、日時は一九七二年（昭和四十七年）十一月十五日午後零時半、初対面の今日出海氏は挨拶を済ますと氏独得の人懐こい打ち解けた調子で語りかけた。

「どうです、キッシンジャーさん。この際ひとつ、われわれ日米両国民の間で『心の安保条約』を結ぼうではありませんか。僕は、これをニクソン大統領に提案したいんです。それには、大統領の右腕のあなたにまず賛成して貰わないと……」

その頃既に国際政治の立役者として世界的に注目を浴びていたキッシンジャー補佐官（後の国務長官）も、その真意を計り兼ねてか瞬時やや途惑いの表情を覗かせた。

通訳の労をとったのは、当時在米日本大使館に勤務していた畏友岡崎久彦氏（現外務省情報調査局長）。

今氏の含蓄をどう英語で表現したか筆者の記憶は定かでないが、直観が鋭く頭脳明晰で廻転の速いキッシンジャー氏のこと、打てば響くような反応だった。

「大賛成です。心が通い合った安全保障条約でなければ、それは価値もなければ永続もしません。確かにわれわれは盟邦として共通の理想と利害関係をもっていますが、同時に日米間には歴史や伝統、

そして文化や思考様式において大きな違いがあります。

このことを、今年の六月に私はハワイトハウス入りをして初めて日本を訪問し、改めて痛感しているところです。今度あなたが始められたお仕事は、その意味で極めて重要です。

いまキャンブ・デービット（山荘の公邸）に籠っているニクソン大統領に、貴提案を伝えます。大統領も共鳴することと思います。この次お出になったら、直接お会いになり、その具体化についてお話になって下さい。」

今日出海氏ならではの『提案』だった、といまでも私は考えている。初代の文化庁長官を勤めた後、一九七二年秋発足したばかりの国際交流基金の理事長就任を懇請された今氏は、まず日米間に血の通った文化交流を図ろうと自ら渡米したのである。

筆者は、基金の運営審議会委員としてそのお伴をした。この会見の後で、今氏は私に対し所信を吐露された。「君、条約は破られるためにある」と言ったのはレーニンだったかね。ドゴールは『フランスが破滅に曝された時、同盟国アメリカがわれわれのため自らの死を賭して侵略から守ってくれるという保証は何もない』と断言していたよ。

いざという時に、肝腎なのは相互の信頼関係だ。心の絆でがっちり結ばれてい

れば、一片の紙切（条約）なんかどうだっていいんだと思うが、どうかね。」

「キッシンジャーはもともとドイツ人だし、ビスマルク流の権謀術数で国際政治の舞台廻わしをしているのかと思っていたが、文化のことも解るんだね。見直したよ。却々の人物、これから日本も大事にして付合うべき人だなあ」との感想だった。事実、今氏は帰国すると、時の総理や外務大臣に篤とその話をされた。

文化とは、心のゆとりと潤いだ。文化や教育には、そして国際交流には時間と金を惜しむな、というのが晩年の今氏の持論だった。

「一見無駄なような長期投資こそが必要で大事なんだ。そこところが目先だけの当世政治家や役人共にはさっぱり解らんからなあ」と憤嘆頻りだった。

想えば、国際交流基金がこの種の唯一の公的機関として初めてわが国で発足した時、政府の出資金は五十億円、東京虎の門に近い雑居ビルの二階に仮事務所を設けての侘しいスタートだった。

そして十二年後の昨年度現在、民間の拠金は皆無に等しく、政府出資金は総額五百億円に満たず、事業費はその運用益によって賄われているのが寒心に堪えない実状である。

今氏は「一介の文士」と自称していたが、作家であり、同時に評論、翻訳、演出、音楽、美術、映画等実に多芸多才の非凡な教養人だった。毒舌をユーモアに包め、機知縦横の座談と講演は無類といつてよく、洒脱な人柄は多くの人に愛され、故小林秀雄氏を初めとしてすぐれた親友に恵まれた。

何よりも氏の鋭い国際感覚と世界に通ずる識見に、筆者自身は不断に教えられるところが多かった。

実際対外活動の範囲は広く、後年中国に本格的な歌舞伎を派遣し、フランスで鑑真和上の乾漆像（国宝）を公開し、イギリスで「大江戸展」を開くなど、文化輸入超過を是正しようと努力し、各国で高く評価された。

文化や芸術に国境はない、との信念から全方位文化交流を目差し、ゆくゆくは全世界の国々、人々との間で『心の安保条約』のネットワークを築き上げること、これが偏狭を排し自由を愛した『愛国者』今日出海氏の抱いていた雄大な構想だったのかも知れない。

お会いすれば談論風発で、夢や理想を語るときに若々しい情熱は、エスプリを利かせた巧みな話術と共に、時の経つのを忘れさせてくれた、あの愉しみはもう望めない。

先月末、八十歳で長逝された氏の冥福をお祈りする今年の暑い夏、降るような蝉しぐれも一入寂しい。

読もう、書こう、考えよう

—文化創造への参加—

京都産業大学教授 若泉 敬

「読まない」、「書かない」、そして「考えない」の「三ない主義」が、最近の大学生に見られる顕著な現象だという指摘がある。単純で誇張しているかも知れぬが、筆者の接する学生諸君には確かにこの傾向がある。

だが、「近頃の若い者は…」を抑えて、自ら省察するに、こうした現象は果して若い世代だけに特有のものだろうか。それとも、飽食暖衣の泰平楽に慣れ、安易な「中流意識」の自己満足に埋没しつつある日本国民を広く被う「症候群」ではないだろうか。

心ある人々によって、「文化国家」には凡そ似合わぬ精神的貧困が、「経済大国」となった日本の物質的繁栄と対比して、否、反比例して叫ばれ憂えられるようになって久しい。

もし本当にそうだとしたら、何故われわれは衣食足りて礼節を知らず、真の生き甲斐や魂の高貴さを見失い、人生や国家の理想と目標を持たず、モノ・カネ・エゴの暗き海を漂う「心貧しき大衆」に堕しつつあるのだろうか。

『文化の日』に当り、その由って来たる所を讀者諸賢と共に静かに熟慮してみたい。

文化とは何か。人類に固有なものとしての文化を成り立たせているのは言葉（言語能力）である、というのが普遍的に受け容れられている定義である。

「文化」は軽薄に乱用されその概念は混乱しているが、言語こそ文化の中核である、ことに間違いはない。

この言語能力が衰頹している。このことが、本質的に問題なのである。つまりわが国においては、日本語の文章をきちんと理解し、正しく活用する能力が著しく低下していることが正にその淵源である、と筆者は主張したい。

現代は、いわば意味喪失の怖るべき時代であり、人間存在そのものに係わる危機の深刻さは歴史上前例を見ない。人間の好奇心の所産である科学や技術が逆に人間を支配し始め、全面核戦争、資源の涸渇、生態系の破壊といった物理的脅威が眼前にあるが、その根は遙かに奥深い。この危機的状況の打開に挑戦し、これを超克する恐らく唯一の残された途は、人類の文化創造性を蘇生させることである。

その鍵は、「考える葦」として、哲学者パスカルが言ったように、「人間のあらゆる尊厳は思考のうちにあり、思考こそ人間を偉大にする」ことの明確な自覚にある。

そのためにわれわれは、まず言語能力を回復し、本気になって考えることから始めなければならない。

ここで、抽象論を止めて、筆者は極めて具体的に思い切った提言を試みたいと思う。

第一に、せめて今日一日、テレビを消

して良書に親しもう。確か数年前、当時のシムミット西独首相が、週一回「テレビ休日」を設けて読書や家族団欒に当てよう、と勇気ある発言をしたことがある。長所利点を認めるにしても、映像視聴時代の主役として君臨するテレビの弊害、とりわけ暴力、セックス等の俗悪番組は眼に余る。子供への悪影響は測り知れない。受身一方の他人志向型「感覚人間」をつくり出し、「一億総白痴化」（評論家・故大宅壮一氏の言）を招きつつあるといつて過言であるまい。

その点、読書は、自ら行う主体的で能動的な「対話」であり、誰でも一人で行うことができる生涯の「学習」である。特に古典と呼ばれる伝来の宝庫から得られる収穫の愉しみは無限だ。活字を離れて、人間の精神は決して成長しない。

第二に、せめて今日一日、電話の使用を止めて、ペンを執ろう。手紙を書き、自らの生活を綴ってみよう。電話は便利のようで、文明の兇器でもある。時間構わず茶の間へ侵入してくる電話に、何故われわれは飛び付かねばならないのか。電話などなかった時代、充実した生活と文化を持っていたではないか。心の籠った手紙の方が、日本語も満足に喋れぬ長電話より、どれだけ多くの相手の胸中に訴えることか。離れて住む両親や友人に宛てた一枚の葉書すら、如何に喜ばれることか。

書くことは、読むこと以上に何倍も難しい。だからこそ、できるだけ正しい日本語で自分の考えや感情を記述し表現する精一杯の努力は、文化の本質に迫る最も基礎的で創造的な行為である。

（なお、ここで象徴的なものとして電話を取り上げたが、緊急、業務、公用等の場合はこの限りでない。次の例示も、

また同様である）

最後に、せめて今日一日、マイ・カーの使用を止めよう。車が瞬時に殺人の兇器になり得ることは誰でも知っている。車であくせくする代わりに、心のゆとりと考える時間を持つて有意義に過そう。

読むこと、書くことに加えて、散歩、スポーツ、趣味もよし。芸術活動に自ら打ち込むのは最高だが、他面家族揃って家の整理、庭の手入れもいい。近くの山まで徒歩で出かける紅葉狩りのピクニックも楽しい。皆で野良に出て畑を耕すのは素晴らしい。

本来、「文化」の語源は「耕す」ことにある。読み、書き、そして考えながら、吾が心田を耕すことだ。

これこそ、人間にとって不可欠の言語能力を涵養し、想像力と創造性を開発し、精神的貧困を克服する身近な王道である。そしてまた、これこそ、教育の本質ではないだろうか。

菊薫る晩秋の佳日、随分乱暴な提言を敢て試みた筆者の、意のあるところを酌んで頂ければ幸甚である。

世界平和と日本の寄与

― 国連平和維持活動に参加を ―

京都産業大学教授 若泉 敬

日本の戦後外交は、一貫して国際連合（国連）の旗標を高く掲げてきた。先月公開されたわが外務省の「外交文書」は、サンフランシスコ講和によって独立した日本が国際社会へ復帰する努力の跡を窺わせるものだが、その中で筆者が注目したのは国連加盟への苦難な道程であった。独立後間もない一九五二年六月に加盟を申請したが、ソ連の拒否権に遭って、その実現に四年半もかかった。日本は第八十番目の加盟国である。

五十一カ国で発足した国連は、いま百五十九カ国に達し、今年四十周年を迎える。今秋の国連総会には、このことを記念して各国の首脳が参加する見通しである。恐らくソ連のゴルバチョフ新書記長も出席し、この機会にレーガン大統領と久々の米ソ首脳会談が早くも期待されている。日本の首相も出席すべきである、と筆者は考える。

顧みると、第二次大戦直後、国際間の恒久的平和確保を至高の目的とする国連が全人類の希望を担って誕生した。しかし、四十年の歴史が示すその実績は決して満足すべきものではない。国連は質量共に大きく変貌した。

第一に、世界平和に責任を担う筈の五大国（米ソ英仏中）が安全保障理事会でその特権（拒否権）を乱用し、故に国連憲章に謳われた国連軍は遂に創設されず国連は平和を破る国を實力で阻止するだ

けの有効な手段を持っていない。そこで、地味で限定された国連平和維持活動（PKO）が生れた。

第二に、多数の新興独立国の加盟を反映して、「南北問題」の比重が増大し、経済、社会、文化の諸問題への関心が昂まった。

肝腎の安全保障理事会は、軍縮を始めとする重要課題や緊急事態に対し、五大国の利害が一致しない限り何の行動もとれず、本来の機能を發揮していない。

一方、国連総会は情性の年中行事化し、延々三カ月に涉って首相、外相など各国代表の「演説会場」の観を呈している。議論ばかりで具体的成果に乏しく、次々と採択される決議は実行に移されない。こうした国連の実態に対し、近年来失望感が広まってきているのも無理はない。

建前とはいえ、国連中心主義を外交の柱の一つとしている日本は、この国連にどう対処し、その将来をどう考えたらよいのか。わが国は国連の予算面で米ソに次ぎ世界第三位の分担金を拠出している。この点からだけでも、われわれは積極的に発言し行動する権利と義務をもっている。

現状が如何に不満なものであろうと、われわれは国連の将来に悲観的になり、諦めたり絶望するわけにはいかない。何故ならば、理由は簡明、これに取って替るべきものが無いのである。

「地球船・宇宙号」の時代に、加盟国の普遍性と活動分野の包括性ということのみでも、国連の存在意義を認めなければならぬまい。年に一度の国連総会が、各国首脳に多角的ロビー外交の場を提供するだけでも意味がある、としなければならぬだろう。

今秋の総会に日本の首相も出席すべきだ、と筆者は述べた。美辞麗句の演説のためではない。この記念すべき機会に、日本が国連のPKOに積極的に参加するよう決断してもらいたいと希うからである。今日まで数多くの局地的な紛争や戦争を收拾し、休戦や兵力引き離し、それらの監視と警察行動によって平和を維持する現実的必要から生れたのがこのPKO機能である。

過去にもかなりの例があるが、現在、一九四八年以来存続する「国連インド・パキスタン軍事監視団」、「国連パレスチナ休戦監視機構」を始めとして、「国連キプロス平和維持軍」、「国連イスラエル・シリア兵力引き離し監視軍」、「国連レバノン暫定軍」などがある。

それぞれの場合によって異なるが、数カ国乃至十数カ国が提供した数百名から数千名の兵力が紛争地域に駐留し、名称の如く平和維持に意義深い地道な貢献をしている。

日本は「平和国家」である、その国策は世界の平和に寄与することだ、といくら力んでみてもやれることには限界がある。外交の檯舞台で主役になって、核軍縮交渉に影響力を行使したり、イ・イ戦争やインドシナ戦争を調停するような派手なことは出来そうもない。

ところが、日本が自ら決心すれば実行でき、世界からも歓迎される世界平和への直接的貢献の確かな方途がある。それ

は国連のPKOに、財政、物質のみならず要員の面でも進んで協力することである。

従来わが国は、憲法上の制約を理由にこれを断ってきた。だがPKOは、武力行使を目的とせず、あくまで平和維持のための国連の活動である以上、国際的常識に照しても、憲法の前文の精神にも第九条にも抵触しないというのが筆者の一貫した主張である。（例えば、米専門誌『フォーリン・アフェアーズ』、一九六九年四月号に寄稿した拙論を参照されたい）。

眼先の経済的利益の追求にのみ専念し、世界中で深刻な経済摩擦を惹起しながら太平洋を並べて孤立化しつつある日本の現状こそ、「いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」と謳った自国の憲法の精神に反している。

国際情勢の現実を厳しく、日本は「国際国家」として応分の役割と責任を果たさなければ自らの安全と生存を保持することは出来ない、というのが筆者の基本認識である。

戦後四十年、PKOへの参加は海外派兵に繋がるといった「義に懲りて膺を吹く」が如き発想を、われわれはきっぱりと改めるべき時機に來ているのではないだろうか。

日刊福井※「正言」 1985（昭和60）年9月14日（土曜日）

国際交流と日本の役割

―フルブライト氏からの手紙―

京都産業大学教授 若泉 敬

「日本が第二次大戦後四十年間になし遂げた瞳目すべき成果と繁栄は、国家政策として国際協力を堅持し軍事大国への途を選ばなかったからであろう。

このことは、いま米ソ超大国をはじめ世界の国々が学びとらねばならない意義深い教訓を含んでいる。願わくば、日本が軍拡競争に荷担せず、その経済・技術力をもって世界の建設的分野で貢献してほしい」

これは、今年八十歳を迎えたウイリアム・フルブライト氏から、一般筆者が受けた書簡の要点である。

マンズフィールド駐日大使の同僚として共に米議会で活躍し、約十年前米政界を引退するまで、十五年間もアメリカ上院外交委員長の一職にあった同氏の名前を記憶している人も次第に少なくなってきた。

然し、ベトナム戦争に終始反対し、ジョンソン、ニクソン両大統領の政策を厳しく批判し続けたことは内外でよく知られている。

政治家というよりも学者にふさわしい同氏の識見、洞察、勇氣に敬意を表し、多少意見は違ってもワシントンで永年親しくしていただいた筆者に対して、嘗て同氏は「歴史に『もし』は許されないが、あの誤った戦争にもしわが米国が介入していなかったら、いま頃内外の状況はどうなっていたらどうかと想うと慙愧に堪

えない」と述懐したことがある。

ベトナム戦争の最終的評価を下すには、筆者の管見では、なお時間を藉す必要があり、後世の史家の手に委ねるべきであろう。

ここで筆者が強調したいのはそのことではなくて、フルブライト氏が恐らく不朽の名声を遺すであろう「フルブライト奨学金」の意義についてである。

同氏のイニシアチブによって第二次大戦後間もなく米議会で立法化された、この米国と全世界との学術文化交流計画によって既に十万人以上の人々がその恩恵に浴している。

日米間においても、敗戦直後海外渡航が困難な時期から始まって五八〇〇人以上の日本人が米国で学び、一二〇〇人を超えるアメリカ人が日本に留学している。フルブライト氏をして、この計画を決意させ実現させた彼の動機、と言うよりも不拔の信念は凡そ次のように要約できよう。今世紀に入って人類が経験した何

度かの大戦争、それをもたらした軍備競争の悪循環のなかで、世界平和を維持し、人類が「生き残る」ことが出来るか否か、その鍵は諸大国が持つ軍事能力の優劣にあるのではなくて、これら諸国が抱く「意図」に懸かっている。

その意図に望ましい影響を与えるために、相手を如何により正しくより多く理解し、誤った認識をどの程度是正し得る

か、このことが不可欠に重要なのである。相手の文化、伝統、生活様式、ものの考え方、そして民族や国家の心理と行動形態をどこまで真に理解し得るか、これが肝腎なのである。

無知と不可解は、偏見、不信、敵意の温床となる。逆に、学問、芸術、スポーツ等の分野で幅広い国際文化交流が行われ、教育と啓蒙によってお互いの理解が進むならば、一勿論これは容易なことではないが―われわれは相手に対して宗教、人種、言語、思想、イデオロギー、信条などの相違を超えて寛容であり得ることが出来る。

上記のことを、同氏は、一九二〇年代の若き日に三年間、著名な「ローズ奨学金」を与えられ英国オックスフォード大学で学んだ自らの体験から確信するに至ったと言う。

日本に対するフルブライト氏の期待は大きい。

国際社会のあらゆるレベルにおいて活発な交流、理解、協力、援助を行うため、日本の政府と国民が先導的な役割を果たしてくれることによって、「世界の模範」になって欲しい。

そして、日本はどのような寄与をなし得る資格と条件を具備した恐らく唯一の大国かも知れない、とさえ同氏は言っている。

わが国の国際文化交流への劃期的な貢献は、眼先の金儲けに狂奔して世界中から袋叩きに遇いかねない昨今の緊迫した状況を打開する速効薬にはならないにしても、長期政策の一つの支柱（国家目標）としなければならぬ。

それは決して安易な選択ではなく実際には非常なる国民的努力の継続を必要とするが、仮令それが自己犠牲を伴うにし

ても、基本的なわが国の国益に合致するであろうことは疑いない。
この際思い切つて、例えば、国際交流基金の出資を増額し、政府開発援助（ODA）を質量共に飛躍的に改善できないものか。

英知と創意を凝らして広く門戸を開放し、官民挙げて海外との相互交流と文化創造に参加協力することにより、名実共に世界における日本のアイデンティティ（自己証明）とレーゾンデートル（存在理由）を確立するための果敢な措置が執れないものであろうか。

筆者がかく訴えるのは、単なる希望的抽象論ではなくて、二十一世紀に向けて自らの生存と安全を懸けての死活的な「国家政略の課題」であると信ずるからである。

誰か祖国を愛せざる

― 沖縄復帰十五年に想う ―

京都産業大学教授 若泉 敬

昨日、沖縄県は日本に復帰して満十五年を迎えた。日本の国土で唯一の凄惨な日米地上攻防戦を経験し、県民多数を含む彼我二十数万の人々が散華した沖縄、敗戦以来二十七年間にわたって異民族の支配下に呻吟した米軍基地の島沖縄。

いま静かに顧みるに、この沖縄県民百万同胞の「悲願」の祖国復帰とは、如何なる意味を持っていたのだろうか。

亜熱帯の蒼い海、青空から降りそそぐ陽光、白い砂浜に囲まれた美しい珊瑚礁の島々、マリンスポーツのメッカ。こうした形容詞をちりばめた琉球列島に「太陽のリゾート」を求めて、今日も本土各地からジャンボジェット機が一日何便となく沖縄へ飛び立っていく。船の定期便もある。年間三百万人の観光客誘致をめざして開発が進められている。

修学旅行を含めて若者たちの姿が目立つ。彼らにとって、魅力ある南国情緒への旅の他に、沖縄は何か特別の意味を持つているのであろうか。

今年は、「海邦国体」と名づけられた沖縄県初の国民体育大会が開催される。秋の大会には、天皇陛下が戦後初めて沖縄を訪問され出席される予定である。夏季大会および全国身障者スポーツ大会には、それぞれ浩宮さまおよび皇太子殿下の出席が決まっている。意義深いことである。

注目この沖縄県の一部で、近年来「日の丸」論争が続いている。一昨年、文部

省が全国の小中学校での日の丸掲揚、君が代斉唱の実施率を調べたところ、沖縄県が際立ってそれが低かったことから、国旗、国歌問題が教育の場のみならず政治的にも大きく取り上げられてきた。

同県教育長の指導もあって、小中学校の今春の入学式における日の丸掲揚率は九八%にまで達したが、国歌の実施率は五%台である。

県のこの指導に強く反撥した沖縄県教職員組合は「ひめゆり、健児の学徒さえ、動物の忠誠心」を持たされたのは、軍国主義と日の丸・君が代による皇民化教育のせい」だと抵抗の姿勢を示し、また今年二月にも県教育長に対し、「国体では天皇制国家を想起させるような日の丸・君が代はやめよ」、「天皇を招請するな」などの要求書を提出し、今後抗議行動を予定しているという。（朝日新聞「本年五月一日付」）

ここで筆者は、沖縄県復帰の原点に立ち還って篤と考えてみたいと思う。敗戦後米軍の直接支配下に永年苦悩した沖縄の同胞たちが終始、「祖国」である日本への速やかな復帰を冀ってきたことは疑いない。回想するに、昭和三十年代当時、最も「愛国的日本人」と言われた彼らの熱烈な祖国と一体化への心情は、本土に住む我々の胸を打たずにはおかぬものがあった。

昭和三十五年、幅広く県民的な組織として「沖縄県祖国復帰協議会」が結成さ

れた。その中核的存在であった沖縄教職員会（会長、屋良朝苗氏、後の公選主席）は、同年、当時米軍によって禁止されていた日の丸掲揚について、「一九六一年の門出を祝福するため、全琉的に日の丸を掲げる運動を行う」ことを呼びかけた。

その実践項目の第一に、正月三日間各戸各学校共に日の丸を掲げる、として具体的にそのやり方を指示した上で、最後に「正月元旦にはどの職場でも日の丸をかかげて祖国復帰の祈願を行う」と結んでいる。（『沖縄県祖国復帰闘争史』資料編、六四頁）

そして五年後、昭和四十年元旦にアメリカ兵が沖縄で日の丸を盗み取った事件が起きた時、祖国復帰協会の喜屋武真栄会長（沖縄県教職員会事務局長兼務、現在参議院議員で二院クラブ所属）は時の琉球列島米国高等弁務官ワトソン中将に対し次のように抗議した。「国旗をひきさく行為は国家を侮辱する重大問題である。（中略）日本国民として祖国同胞と同じように日の丸をかかげて正月を祝うのは極めて自然な感情である。（中略）ここに再び（筆者注、前年九月に同様の事件があつて抗議）嚴重な抗議を行い、軍当局は日本国民に正式に謝罪して、今後絶対にかかる事件をひき起さないよう根本的措置を講ずるよう要求する。」（前掲書、二四七頁、二四八頁）

国旗日の丸だけではない。その頃から沖縄の同胞は、我々本土の日本人の国家観に対し、より根源的な問題提起をしていた。例えば、昭和三十九年四月、祖国復帰協議会の喜屋武会長は「祖国なきジブシーは憐れなる民であるというが、祖国をもち、然も祖国に帰りたいと熱願し乍ら、その祖国をもち、然も祖国に帰らず、また渡航の自由さえもない国民は

尚々憐れな民であるといわねばなりません。」という言葉で始まる切々たるメッセージをもって、祖国九千万同胞に対し分断された民族の悲劇と速かな復帰による独立の達成を訴えたのであった。（前掲書、一七五頁）

昭和四十二年四月一日、同じく喜屋武会長名で祖国復帰協議会は、全国の都道府県市町村議会に対し、「沖縄は日本なのですー沖縄返還の決議を満場一致で行ってもらいたい」と訴えた。（前掲書、三五四頁）。この感動的なアッピールは次のように結ばれていた。

最後に、人間解放の自覚が平和と独立に結び着くとき、「誰か故郷を思わざる」の心情は「誰か祖国を愛せざる」の祖国愛に通ずるものと信じています。沖縄九十六万県民は、日本国民としての正しい生き方をそこに求めているのです。「わが身をつねって他人の痛さを知れ」というが、他所ごとだと思わないでほしいのです。「血は水よりも濃い」のです。

日本人らしく生きていくために、祖国の真の独立を願い、自由と自治と平和と民主主義を要求して止まない沖縄県民の誰しも抱えている真実に触れてほしいと私は心から願ひ且つ訴えるのです。皆さんの、心からなる立ち上りと御協力を願って止みません。

本年、待望の「海邦国体」を迎えるに当り、沖縄県民のみならず全国民が協力してこれを成功させるために、我々心ある日本人のすべてが、十五年前に沖縄県の同胞を吾が祖国に迎え入れたあの復帰の初心に立ち還るべきではないだろうか。その初心とは、自由、自治、平和、民主主義、そして真の独立と祖国愛ではなかったのだろうか。

国を思う心

― 小泉信三博士の遺言 ―

京都産業大学教授 若泉 敬

作家の阿川弘之氏が本音を語った近著『国を思うて何が悪い』を一気に読んで、共鳴するところが少なくなかった。

「自由主義者の憤慨録」というサブタイトルが附いていて、ややユーモラスな語り口で昨今の世相を鋭く斬っている。以前から、大新聞など一部マスコミの偏向した報道や、また「進歩的」文化人、学者、政治家等の偽善的言動を苦々しく思ってきた筆者は、聊か溜飲の下がるおもいだった。

阿川氏の憤慨はその大筋において感情的なものでなく、内外で通用する良識を備えた正論だ、と私は考える。天皇制、国旗、国歌等についてのこの作家らしい論致も、心ある日本国民の幅広い共感を喚ぶのではないだろうか。諸君諸賢に一読をお勧めする所以である。

この本のタイトルから筆者が想起したのは、三十年も前に読んで感銘深かった碩学小泉信三博士（元慶應義塾大学塾長）の著書『国を思ふ心』であった。

その中の冒頭的一篇「遺児の皆さんへ」には、次のように述べられていた。「その人々の悪戦苦闘と犠牲にも拘らず、日本は敗戦国となりました。けれども、戦の勝敗如何に拘らず、その人々が国に対する義務に忠誠であり、さうしてその事に命を捨てた行為と犠牲の貴いことは、変るべきではありません。」

身を殺して仁をなすは仁の最も大なる

ものであるといひます。

即ち人を愛し、人を救うために自分が死ぬといふことは、最高の愛の行為だといふことです。

戦死者は特定の人を救うために死んだのではなく、日本国民といふ、過去から未来に及ぶ同胞の全体の為に身を殺したものであって、その人々に身を殺させた同胞国民としては、その人々とその行為とを忘れては済まないのです。（中略）

この切々たる短文の最後は、「日本を愛するものは、その日本のために死んだ人々のことを忘れてはなりません。」

同時に私は、皆さんのお父さんがそのために死なれたこの日本といふ国を、産業の上、文化の上、有形無形両面に於て、少しでもよりよき日本として、更に次ぎの世代の国民に引き継がせるのが、吾々の、また皆さんの願ひでもあり、務めでもあるといふことを、時々考へてもらひたいと思ひます。」と結ばれていた。

八月の声を聞くと、われわれはまず盂蘭盆を中心に、心のふる里を訪ね、祖先の霊をまつり冥福を祈る意義深い日のことを想ひ浮べる。

だが、その十五日は同時に日本敗戦の記念日でもある。その前に、広島や長崎の原爆の日もある。それらは決して、遠い昔の物語ではない。

従って、戦争と平和という大事なテ―

マを避けては通れない炎暑の訪れである。幸いにして、内外で個々の問題はあるにしても、総じていま日本は平和と自由と繁栄を謳歌し、世界で最も恵まれた国の一つであると言つてよいだろう。

われわれはそれを感謝して、その恩恵を享受しよう。

例えば、待望の夏期休暇は健康増進とリクリエーションの好機であり、家族団欒をはじめとして旅行やスポーツに、あるいは各種のレジャーや「高校野球」に熱中するのも大いに結構なことだと思ふ。しかし、それがすべてだということであつてはなるまい。

仕事や学業の手を休め、心にゆとりを持った一刻、折にふれてわれわれは、身を殺して仁をなした人々のことを静かに想ひ、祖先たちが築き上げた伝統の精神に還り、厳しい世界の大勢のなかで祖国の命運に念いを馳せるべきではないだろうか。

そして、今日のわが国の平和と自由と繁栄の永続を希うと共に、小泉博士の言われた如く、「少しでもよりよき日本として、次の世代に引き継がせるための責務」を担う自覚を新たにすべきではないだろうか。

このことこそが、戦争の尊い犠牲となつた総ての人々とその遺族たちを偲び、戦没者を追悼する最善の鎮魂である、と筆者は考えるからである。

日刊福井※「正言」 1988（昭和63）年3月19日（土曜日）

大学に合格したS君への手紙

― 人生の礎をつくる学生生活 ―

京都産業大学教授 若泉 敬

S君、大学合格おめでとう。長くて厳しかった受験の重圧から解放されて、いまは喜びで胸一杯だと思います。そこで入学前に、初めて大学生になるための心構えについて、何か少しでもお役に立ちたいと思って急いでペンを執りました。

この拙い手紙を、私はお祝いの気持ちを籠めて書きました。もしもお説教じみたところがあつたら、それはあなたへの期待のあまりのこととお許し下さい。

まず、御両親に感謝していただきたいと思います。あなたと同じ年齢の若者で、大学に進学できるのはせいぜい四割で、あとの六割は、不幸にして希望する大学に入れなくて一年後に再挑戦する人々と、これから社会に出て毎日働く人々です。実社会で苦労しながら早く自立する途も、それ自体、非常に立派な人生の生き方だと私は考えています。とにかく、大学進学は決して当り前のことではありません。

あなたは、御両親の物心両面での温かい援助のおかげで、これから四年間、自由な環境のなかで勉学にスポーツに自分の青春を謳歌することが出来るのです。だからこそ、この素晴らしい機会を最大限に活かして、悔のない大学生の生活を送っていただきたいと希うのです。

あなたの合格した大学は、第一志望校ではなかったようですが、そのことで劣等感みたいなものを持たないで下さいね。

「偏差値」などという妙な物差しで、大学を位置づけたり、入学生を評価することに、私はどうしても納得がゆきません。個人がそうであるように、大学にも個性や学風があり、必ず長所と欠点があります。あそこは何流校だ、という受験産業による格づけなどは当てになりません。

そういう世間の評判よりもはるかに頼りになる尺度は、自分自身であります。今度入学する大学で、あなた自身がどのような学生生活を送るか、ということすべてが決まるといってよいでしょう。その点は割り切って、自信を持って下さい。

そこで、最初の私の助言は、万事に積極的な態度で臨んでほしいということです。残念ながら、高校までと違って大学というところは、一般にあまり親切ではありません。自らが求めないかぎり、自らが行動を起こさないかぎり、何も与えてはくれないのです。甘えは禁物です。これが自由の代償かもしれません。

大学生にとって恐らく最大の敵は、三無主義（無気力、無関心、無責任）といわれる消極性です。これを打破して、受身ではなく、思い切り能動的な姿勢でスタートを切って下さい。

なるべく早く、今後四年間に達成すべき具体的な目標を立て、それに挑戦する勇気を出せば、そこに夢と生き甲斐が生まれ、学生生活は自然と楽しく充実して

きます。どうか今から、そうした目的意識をはっきり持っていたきたいと思えます。

第二に、友人をつくって下さい。生涯つき合える親友、心友、真友を何人かは必ず持つてほしいのです。このことは、あなたの人生にとって最大の財産となることでしょう。こうした良き友をつくるのにも、積極的にこれを求めなければなりません。例えば、クラブやサークルに参加し、そこでの触れ合いが一つの近道になると思います。異性の友人、そしてまじめで熱烈な恋愛もよいでしょう。それは青年の特権です。

第三に、何冊かの愛読書を持つてほしい。大学生になったら、テレビやマンガの類は極力退けて、その代りに古典といわれる東西の文学、思想、歴史などの書物に親しんでほしいのです。視聴覚中心の映像化時代に育ったあなたたちにとって、活字による思考や表現は苦手かもしれませんが、だが、読むこと、書くこと、そして自己主張することは、人間の精神的成長にとって不可欠の要素だと私は信じています。

読書は一種の対話であり、それは繰り返すことによって消化され、精神の糧となります。古典は、いつの時代でもみずみずしい生命力を持ち続けます。折にふれてひもとく何冊かの愛読書は、あなたにとって生涯心の支えとなることでしょう。

第四に、旅行です。未知の世界での、人と自然との不思議な出会いを求めている旅は、ロマンと冒険に満ちています。若き日に、自ら目的と計画を立てて、手づくりの旅をする。そこで得られる収穫は大きい。もちろん国内もよいのですが、学生時代、夏休みなどを利用して一度は

海外に出かけてほしいものです。その資金づくりのためのきちんとしたアルバイトなら、私も大賛成です。

ほかにもお勧めしたいことはまだ沢山ありますが、最後に言いたいのは、自己の人生観の確立です。

つまり、徹底して自分を見つめ、真の「自分」を見つけることです。一見豊かな時代といわれる今日、なんとなく現状に妥協し、安易に満足し、周囲に流されてしまうような生活では、折角の四年間を大学で過ごす意味が薄れてしまいます。

そうではなくて、たった一回の、これから始まる吾が人生を如何に生きるべきか、この「永遠のテーマ」に思い切って挑戦してみてほしいのです。

その真剣な模索の過程から、あなたは一人の人間として、社会人として、国民として、国際的日本人として立派に成長していけることと信じ、期待しています。

最後になって気づきましたが、学生の身分たる学問に励んでもらうことを、つい書き忘れるところでした。昔から「よく学び、よく遊び」といいますね。S君、大いに学生生活をエンジョイして下さい。では、お元気で。

若泉 敬(わかいずみ けい)先生 略年譜

1930(昭和5)年3月29日	福井県今立郡服間村(現・越前市横住町)に生まれる(喜助・マツエ様の長男)	
1944(昭和19)年4月	福井師範学校入学	<14歳>
1945(昭和20)年7月19日	福井大空襲を体験	<15歳>
	・世界に貢献する「国際的日本人」を目指す誓いを立てる	
1950(昭和25)年4月	東京大学法学部政治学科(旧制)入学	<20歳>
	「学生土曜会」で活躍する	
1954(昭和29)年4月1日	保安庁保安研修所(のち防衛庁防衛研究所)教官	
		<24歳～36歳>
1955(昭和30)年1月	英国ロンドン大学大学院(国際関係論専攻)留学	
		<25歳～27歳>
1959(昭和34)年9月9日	同郷の根谷ひな様(福井師範学校卒・明治大学卒・福井県初の女性弁護士)と結婚	<ご両人29歳>
1960(昭和35)年1月19日	長男の若泉 耕(改め聡一郎)さん誕生	<30歳>
1960(昭和35)年8月	米国ジョーンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究所へ研究留学	
		<30歳>
1966(昭和41)年4月1日	京都産業大学世界問題研究所教授(所員・法学部教授)として就任	<36歳>
1968(昭和43)年12月26日	二男の若泉 核さん誕生	<38歳>
1969(昭和44)年3月	中央教育審議会臨時委員	<39歳>
1970(昭和45)年12月1日	京都産業大学世界問題研究所長・教授	
		<10年間：40歳～50歳>
1972(昭和47)年5月15日	沖縄の祖国復帰・施政権返還に尽力	<42歳>
1974(昭和49)年4月	米国ウッドローウィルソン国際学術研究所客員研究員	
		<44歳>
1980(昭和55)年3月29日	(自身の誕生日)東京都杉並区桃井から福井県鯖江市つつじヶ丘に転居	<50歳>
1985(昭和60)年6月23日	若泉ひな様の死去	<享年55歳>
1988(昭和63)年9月28日	マイク・マンズフィールド駐日米国大使を自宅に迎え講演 若泉先生の制作 大地球儀の福井県への贈呈式	<58歳>
	・翌年 福井県国際交流会館ロビーに設置 (直径190cm、重量225kg、電動式で回転)	
1992(平成4)年3月31日	京都産業大学を依願退職	<62歳>
	・創学から26年間の奉職 退職金全額を同大学に寄付する	
1994(平成6)年5月15日	『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』公刊	<64歳>
	・沖縄の祖国復帰から22年の歳月	
1996(平成8)年7月27日	福井県鯖江市つつじヶ丘の自宅にて死去	<享年66歳>

プロフィール

平成29年11月23日

吉村信二（よしむら しんじ）

昭和25年9月7日生・67歳
＜福井県三方郡美浜町出身＞

現住所：〒606-0021

京都市左京区岩倉忠在地町148番地5

電話：(075) 701-5559

携帯：090-8536-6668

略歴：昭和44年3月 福井県立若狭高等学校普通科卒業
昭和44年4月 京都産業大学法学部法律学科入学
・京都産業大学追分寮 寮生長
・志学会執行委員会 副委員長
・ゼミ 国防論・安全保障論
昭和48年3月 京都産業大学法学部法律学科卒業
昭和48年4月 京都産業大学に奉職
企画広報課長補佐、就職課長補佐、外国語学部事務長
広報課長、大学史編纂室長、入学センター課長
学生課長等を歴任
・福井県に出向（福井県立大学の設立事業に参画）
・就職指導14年間、広報8年間、入試7年間従事する
平成20年3月 京都産業大学退職
平成21年5月 株式会社フラットエージェンシーに勤務
営業推進部長として現在に至る

趣味：読書、居合道、国際政治学・安全保障論の研究、企業経営倫理・人財の研究

信条： 若泉 敬先生 『トインビーとの対話 未来を生きる』から
「自己犠牲をも惜しまぬ、価値と実現」 「愛と叡智と創造」

若泉 敬先生の訓導 「我が人生、いかに生くべきか」
「何が本質なのか、真贋を見抜き本物の生き方を探求しよう」

活動： 志縁・尊縁・結縁「三縁の会」代表（塾長）
・ホームページ 「三縁の会」（さんえんのかい）で検索ください

若泉 敬先生に学ぶ

吉村 信二 私家版

2017(平成 29)年 11 月 23 日 改訂

し えん そんえん けつえん さんえん かい
志縁・尊縁・結縁・「三縁の会」

<http://www.san-en.org/>

現住所：〒606-0021

京都市左京区岩倉忠在地町 148 番地 5

電話：(075)701-5559

携帯：090-8536-6668

